

近代産業遺産アート再生学会活動報告ブログより
近代産業遺産関係の活動報告 2009～2010 年堀越分

目次

■ 「追浜幻影 ～亡父の足跡を訪ねる旅のスタートとして～」	2
■ 追浜貝山地下壕見学記 ～地下壕天井の貝化石から教えてもらったこと～	8
■ 近代化遺産／近代産業遺産をめぐる情報の畔で	9
■ 戦艦三笠で「秋山真之と正岡子規」展を開催中	10
■ 「日本の技術革新」シンポジウムに行ってきました	11
■ まちと海と地球の出会い ～続・追浜幻影～	12
■ 月日は百代の過客にして ～夏島の貝が見つめた1万年の物語～	13
■ 「これはスタートです」 第1回 Y フェスタ追浜直前、インディージョーンズかく語りぬ	14
■ 横須賀田浦に旧海軍跡を歩く。科学と煉瓦、鉄やコンクリート、そして夏ミカンの木の話	15
■ オペラ「ニューツーリズム」 ～最近の3つの集いが奏でる物語～	16
■ 追浜サイエンスカフェに行ってきました ～今回の主役は「ピカソ」?!～	17
■ 技術とアート、その運命的な関係を見つめる	18
■ 情報の海のほとりで・パート2 ～技術史を客観視するということ～	20
■ 現役です、東海道! ① -シティガイドと歩く川崎～生麦-	22
■ によきによきと?! ～地上と地中を往来する旧相模川橋脚の物語～	26
■ 望郷の気配、人の想い息づく里 ～シティガイドと歩く田浦～按針塚～	27
■ 「産業観光のビジネス化を考えるシンポジウム」に行ってきました	30
■ 現役です、東海道! ② ～シティガイドと歩く神奈川宿～保土ヶ谷宿～	32
■ 追浜カフェに行ってきました。今回は、壮大な海洋深層水循環の話。深層水の真相はいかに?!	36
■ 今は静かな震生湖にて ～古の災害の記憶を残す里～	38
■ 東京湾第三海堡構造物移設工事見学会に行ってきました	39
■ 夏草や、つわものどもが夢の痕～長尾砦跡、モノレール跡、田谷地底伽藍～	41

●予科練生だった父の思い出ツアーを開始

先の戦争が厳しくなった頃、亡父は、「赤紙を待つくらいなら志願して」予科練に入り、17歳の時、天理（三重海軍航空隊の支所）で終戦を迎えた。予科練時代、最も長く居たのは霞ヶ浦（土浦海軍航空隊）だが、横須賀にも短期間いたと言っていたように憶えている。

父は、予科練時代のことをほとんど語ることなく世を去ったが、死の前日、図らずして予科練の話が出たとき、父の瞳が一瞬だけ少年のように輝いたように見えた。思い出したくないはずの予科練は、終生を自動車製造業の中で過ごした父の人生を規定するものでもあったはずである。予科練時代、父はどこでどんな空を見上げ、どんな生活をしていたのだろうか。私は予科練生として過ごした少年時代の父に出会う旅に出ることにした。

貝山緑地*1は、葉の厚い常緑樹で覆われ、シンと静まっていた。

入口の車止めを入るとすぐ、右手に「追浜神社」という石碑があることに気がつく。歩道は舗装されており、沿道には低木が植えられ、人の手で手入れされている様子わかる。アジサイや木イチゴなどが、花の時期を前に葉をたわわに繁らされている。前方から、高齢な紳士と20歳前後の青年の二人連れが、静かに坂を下ってきた。家族か戦友のいる碑を訪れたのだろうか。青年は、車の運転で祖父に同行したのだろうか、それとも、世代を超えて往時のことを語り継ぐために老人が若者を誘ったのだろうか。交わす声も聴こえない。二人とすれ違ったあと、静粛な空気だけが残された。上り坂は右に大きくカーブし、そのカーブが終わらないまま、右手に石碑が見えた。まだ細い杏の樹立ちが碑を囲んでいる。地元住民の想いのこもった記念樹である。

碑には「国の永遠の平和を念願して、ここ甲飛*2 発祥の地横須賀に、この碑を建立する。平成九年十一月二日 甲飛生存者有志 遺族、一般賛同者有志」と刻まれている。平成9年といえば、ほんのひと昔前である。戦争に青春を捧げた若者のことを忘れない、忘れられない人々がまだいるという事実が、静かな貝山の風景に体温と鼓動を与えた。

碑文の中には、散華した一人が残した辞世の句も刻まれている。

血潮もて茜と染むも悔ゆるなし 雲の墓標の空の御楯は

年若い青年の句としては、あまりにも気高く、昇華しきっている。碑は、あくまでも静かに建ちながら、若い両肩に国家を背負い、空の中に死に逝く己を歌に留めた若者が確かにいたこと、その存在とその想いを、熱く伝えている。丘上には展望台が整備されていた。のぼってみると、日産自動車追浜工場をはじめとする工場群が目近かにみえる。施設は新旧様々で、数十年以上の時を刻んでいるように見えるものも少なくない。このうちのどこかに、戦中をくぐりぬけてきたものもあるのだろうか。初夏の夕暮れ前、湿度の高い濃密な感じの空気の中で、現在の産業を支える工場群が重そうな体を横たえている。その中に歴史の入口があるのかどうか、行ってみたいとわからない。

●若者が作業に没頭する場所 ～日産自動車追浜工場にて～

貝山緑地のアジサイは、もう散ってしまっただろう。7月のある日、日産自動車追浜工場の工場見学参加を実行することにした。

追浜工場のウェブページで工場見学の予定表を確認すると、7～8月の日程は既に随分埋まりつつあった。団体向けがメインのようだが、個人向けの日もあり、2人から受け付けるという。電話で確認すると、空いていれば1人でも受け付けてくれるという。私は、早速直近の個人見学日を申し込んだ。その際、再び予科練関連の施設があるかどうか、見学の際に案内してもらえるかどうか訊ねてみた。

電話口の若い女性は、丁寧な対応で、あくまで生産現場の見学がメインであり、史跡の案内はあまりしていない、施設のことは総務課に問い合わせたらどうかと提案してくれた。総務課に電話すると、電話口に出たのは若

い男性だった。

趣旨を伝えると、「すみません、予科練とは何ですか」と逆に訊ねられた。特攻隊というとわかったようだが、予科練という言葉は知らないという若者も増えてきていることだろう。日本海軍関係の施設があるかという問いに対しては、総合研究所内の施設で、内装こそ一新しているが、外見は当時のままに残している建物があるという。しかし、見学対象施設ではないとのことであった。

工場見学当日は、快晴の暑い日となった。道に迷ったおかげで若干遅れて説明会場に入ると、30人程度の人で埋まっていた。ネクタイ姿のサラリーマン風の姿が目立つが、1組、10代の少年と両親というファミリー客もいる。企業と追浜工場の概要について説明を受けたあと、バスで工場見学の現場に向かった。

バスに乗り込む前、担当の女性が私に近づき、お父様の足跡を訪ねていると聞いているが、十分な案内ができず申し訳ないと耳打ちしてくれた。そういえば、申込みのメールに、見学の趣旨を記入していたのだ。丁寧な対応に痛み入った。

工場施設は広大で、見学対応の施設には、大型バスで向かう。バスから、敷地内の風景を楽しんでいるうちに、茶色いかまぼこ型、またはブッシュ・ド・ノエルの尾根をちょっと尖らせたような、縦横10数メートル、高さ3~4メートルほどに見えるドーム型の建物が1つ、間近かに出現した。「特攻機の格納庫とも言われている」とのアナウンスに、この光景を忘れじと目を凝らすと、ボディを覆う屋根は一面さびっぽく、入口付近のガラス窓は若干破損している。下から1.5メートル小さな庇付きの小窓が横一列に並んでいるが、ガラスは風雨に汚れて曇っており、漏れる明かりはない。中に人影はないようである。しかし、今も倉庫として現役の施設だという。見学後、説明担当者に今後の保存について訊ねたところ、はっきりした方針はないが「市からも保存の要請あるし、解体にも費用がかかるので、当分そのまま」になるだろうとのことであった。

バスは、若干徐行し、一瞬止まってくれたように感じた。若かりし父も、これと同じような施設を出入りしていたのだろうか。いずれにしろ、この光景を忘れてはならないと自分に言い聞かせた。

見学コースは、小型車の最終組み立て工場に設けられていて、案内係の女性が、手際よく誘導、説明してくれる。日産は、「同期生産システム」というのを開発し、注文から約20日で納車できるのだという。1台の乗用車は、2~3万個の部品からできており、その7割がアウトソーシングされているという。下請け、関連工場による部品生産、部分組み立ても含め、全て同期生産システムに必要な管理下に置かれ、人間工学に基づく工程管理、労務管理が行われている。最終組み立て工場では、別々のラインでコックピット、車体部分、ドア部分を組み立て、最後に全ての組み立てを行って、テストマシン上での走行テストまで行って工場を巣立つ。最終組み立てでは、かつての火花を散らせて溶接していた風景は全く見えず、ほとんど全てが、電動ねじ回し1本で作業されていく。

工場内の部品搬送、コックピットの取り付け等では、産業用ロボットが活躍しており、力仕事の必要はない。但し、誰もがきびきびと、淀みなく作業しながらベルトコンベアと立ち向かっており、気が抜けない。作業担当者は、ほとんどが若者で、年長者が、作業管理とヘルプのために配置されている。この光景を、輸送機器の製造作業に生涯を捧げた父がみたら、どんな感想を持つだろうか。「おもちゃの組み立てみてえだな」と面白がるだろうか。

それにしても、若者たちはキビキビと手を動かしている。もしかしたら、目の前の作業に黙々と立ち向かう若者たちの姿は、今も昔も変わっていないのではないか。戦争という不条理に押し流され、死を常に意識しながら、あるいは意識していたからこそ、若者たちは、目の前の作業に没頭していたのではないか。日産工場の若者たちの、小ざっぱりとした制服姿を眩しく眺めながら、私は、ふとそんなことを感じた。

外には、広大なモータープールと、欧米輸出用の大型船舶と、九州方面と往復する国内搬送用の中型船舶が待機している。戦後、米軍の大量のジープを積みだしたその港で、今は、環境に優しいと銘打つ乗用車が、輝く姿を陽に晒し、出荷の時を待っていた。

●軍の壮大な土地利用 ～横須賀のインディージョーンズとともにフィールドに行く～

日産追浜工場の総務課の若者は、私に貴重な情報を伝えてくれていた。追浜行政センターの青木館長が、海軍史跡関係の情報に詳しいというのである。

早速、追浜行政センターに電話して、館長とお話させていただいた。電話だけでもたっぷり1時間、追浜の海軍、予科練史について、こちらの質問を超える壮大な歴史が紐解かれはじめた。資料もあるし、その当時の食器などもある、壕の一部も案内しよう、何時間か時間がとれる時にいらっしゃいと言ってくださった。勿論、私は二つ返事である。

館長の話、否、青木館長という人物との出会いは、期待を大きく超越した。否、期待すらしていなかった世界への扉を開ける大いなる機会となった。忘れもしない平成21(2009)年7月、青木館長を訪れたその日は、父の青春時代への旅、そして、戦争という異常な状況の中で生まれた日本の産業史(という大げさであるが、そのダイナミズムを感じる)への旅の、本格的な幕開けになったといえる。

私は、晴れ女である(数多い出張旅行の中で、私が傘をさす機会は、ほんの2~3回であった)。その私が、貝山緑地に行く時は、何故か2度とも雨が降った。空には低く雲が立ち込め、辺りは静かである。あたかも、魂を冷やし、心を鎮めて向き合えと言われているように。

青木館長は、最初に、館長室で様々な地図や写真を示しながらレクチャーしてくださった。館長の室内には、軍関係をはじめ、追浜の歴史を伝える様々な写真や物品が飾られている。気がつかなかったが、追浜行政センター入口脇にはガラスの展示棚があり、壕で発見されたという海軍の食器、飯盒、防毒マスク等が並べられている。食器類には、海軍の錨マークがプリントされている。錨マークは何種類かあるが、青木館長にもその意味はわからないらしい。確か、父の予科練時代の写真も、シャッポ帽に海軍のマークがついていたように記憶している。それがこれらと同じなのかどうかは、まだ確認していない。

館長の説明は、この辺り一帯がまだ軍事利用される前の古い地図、昭和のはじめ海軍航空基地として整備された頃の地図、そして、第二次世界大戦中(又は戦後すぐ)の地図に沿い、多岐に及んだ。どれも刺激的な話で、私は、父がいつそこにおいて、何をしていたかという疑問そっちのけで話に聞き入った。

2時間ほどレクチャーを受けた後、青木館長は、自ら現地を案内してくださった。カウボーイハットに長靴を身につけ、サーチライト2丁と、長い草刈り鎌を持参されている。まさに、インディージョーンズそのものである(何だか、顔までハリスン・フォードのように見えてきた)。

まず、今も残る海軍時代の建造物を案内してくださった。全て民間の工場用地の中にあり、現在も何らかの形で活用されているものがほとんどで、近くで外観を眺めることしか叶わないが、一面に蔦を這わせた建物、瀟洒なダンスホールだったという施設、海軍航空技術廠本庁舎跡地の説明版等々、どれも威風堂々としている。

続いて、貝山、夏島の壕を案内していただいた。夏島、貝山の地下は、いずれも海軍「壕」施設となっている。日本の軍施設は、敗戦後米軍に接收された。その際に武装解除され、プロペラを外した戦闘機等が一斉に整理されている。接收までの短期間で、日本軍側が急いで機密に関わる事物、資料を破棄したものと思われる。壕施設は、機密中の機密であったのではないか。中を極力空っぽにし、破棄しきれない部分はコンクリートや鉄の扉で固く閉ざされ、放置された。その後は、あたかも棘姫の城のように草木に覆われるに任せ、今日に至っている。近年、館長をはじめとする地元の調査団体により少しずつ構造解明の検討や現場調査が進められているが、未踏のエリアがまだ広がっているという。

外回りからでも確認できる出入り口などをめぐる。閉ざされたエリアには、物資貯蔵庫群らしきものもあるとのことで、ミステリアスである。夏島は、国のエリアとのことで簡単に踏み入ることはできないが、貝山の方は、浄化センターや関連民間事業所の敷地を通り、中に入れる箇所がある。本日は、見学者があることを予め連絡して立ち入っているが、くれぐれも無断で立ち入ることのないよう釘をさされた。治安上、また、放っておくとす

ぐに藪に覆われてしまうとのことで（この日も一部伸びた蔓などをかき分けた）、時折人が入ってメンテナンスしているらしく、内部はからんと片付いている（一部は日を限って一般公開したこともあるとのことである）。

インディージョーンズさながらの青木館長につき従って壕の中に踏み入ると、中はひんやりしていて真っ暗で、館長持参のサーチライトが大活躍することとなった。過去の正確な見取り図が発見されていないので、何に使われていたのかはわからないとのことであるが、生活感あるかまど、煙突、会議室、研究施設、貯蔵庫等々を備えた複合的・総合的な施設であることは間違いない（近くの鉾切山の下には総合病院機能が移転していたとの記録もある）。追浜行政センターに陳列してある食器等は、インディージョーンズ一派が、ここから掘り出した宝の一部だったのだ。

夏島には、飛行場（現試験ドライブコース）に向けて飛行機の格納庫である地下掩体壕が口を開けていた。その奥に控える貝山は、航空技術研究所や本庁舎を隠すような位置づけにあり、頂には気象観測所もあったらしい。私見であるが、これらの壕施設は、陸上施設が爆破されても、管制、指揮命令、整備、技術開発等の重要な機能を維持できるよう、つくられたのかもしれない。夏島、貝山とも、丘というより、巨大な建物ととらえた方が理解しやすい。

貝山、夏島、金沢区側にある野島、海に隣接するそのトライアングルは、飛行場や軍施設の配置上、大いに意識されたに違いない。貝山には、明治時代に築かれた砲台を壊した跡の赤レンガ等が今も残っている。野島も何らかの利用がされていたに違いない。その向こうには、小柴の荒い瀬があり、長浜には今も米軍基地が鎮座している。その向こうには旧富岡飛行場があった（今も日本飛行機が立地している）。湾奥部の首都は、このような重装備で守られていたのだ。軍機能は、所与の地形を上手く利用しながら、絶妙に設計されていた。そして、よく見ると、現在の産業施設は、その跡を無駄なく活用する形で配置されており、その技術と人も、生きながら今に引き継がれてきたのである。



【写真】横須賀市深浦地区にある旧海軍航空技術廠施設の一部。現在は、いずれも民間事業所の所有。（2009.07.20.筆者撮影）

三浦半島が、房総半島とともに、首都圏を守る要塞であった（ある）ことは周知の事実で、砲台や弾薬庫等の跡が残っていることは有名であるが、第二次世界大戦時代の名残が、今も生きた形で引き継がれていることを知る人はどのくらいいるだろうか。

海軍航空隊の主要エリアは、追浜だけでなく、私の住む金沢区にも及んでいる。例えば、関東学院大学は、高度な知識・技術を習得するための航空技術廠教習所・養成所となっていた。東急車両で新幹線が造られることになったのは、生きて戻ってくる戦闘機として開発されたジェット戦闘機の製造技術が、この地に根付いたからと聞く。現在は日産工場となっている一帯は、朝鮮戦争の際の特需として、進駐軍の壊されたジープの整備工場となり、富士自動車修理に就いていました。日産自動車追浜工場には、予科練出身者も含まれていると聞いた。

「家主」が変わっても、輸送機製造技術とそれを担っていた人々は、今も生きているのである。視野を広げると、愛知、群馬、茨城ほか、自動車産業で発展した地域には、かつて軍基地と技術の集積があった。父が、横須賀にいついたのか、どんな訓練又は仕事をしたのかはわからない。しかし、海軍という巨大組織の下で、規律ある生活をし、技術を磨いてきたことは確かである。戦争状態から生還した多くの若者たちが、その後の産業技術を下支えしてきたのである。

貝山の壕には、まだ生々しい彫り跡が残されている。多くの少年兵や学徒たちが、壕掘りに駆り出されたのではない。少年たちは、自らの明日ではなく、国の明日のために戦時下を生きた。私の父は、14～5歳の時、「どうせ赤紙が来るのなら、それを待つより自分から志願しよう」と思い立ったという。予科練生の多くが志願者であった。自らが選んだ軍での生活と訓練に、皆没頭したに違いない（箸の上げ下げ、洗濯物のたたみ方、道具の手入れ等々、父の振る舞いには終世、軍隊式と思われる規律正しさが残っていた）。その従順さ、真摯さで、少年たちは、技術を修得し、壕を掘ったのではない。その先に何かがあるとも考えず、とにかく、そこにある課題を我武者羅にこなす日々だったのではない。私の脳裏に、日産自動車追浜工場で見た若い従業員の働く姿が一瞬よみがえった。

●追浜の幻影に想う

戦争は、絶対悪であると思う。しかし、その中で多くの研究者、技術者が明日を拓く技術を拓き、多くの若者たちがそれを形にするための作業に従事してきた。その真摯な青春の毎日の先に、現在の日本の産業技術の基礎が築かれてきたことも事実である。

現在の産業立地も、大いにその足跡に既定されているのである。その事実は、現代日本の産業技術、土地利用の礎を考える時に無視することはできない。私たちはその隣に暮らし、生活や仕事の様々な面で、その恩恵、その影響のもとにあるのである。

しかし、その姿は意図的（政治的強者は塗り替え、政治的弱者は忘れようとする）に時のベールにかき消され、白日の下で語られることを恐れているうちに、加速度的に人々の意識の中から消え去ろうとする。

ところが、土地にはその存在を知らせるヒントが溢れている。そのことに気がつく、今ここにある平和な工場地帯の上に、ありし日の幻影・・・当時の若者たちが、日々の作業に没頭してきた姿とその現場・・・が、私たちの脳を借りてカムバックするのである。

彼らに降り注いだ陽の光、天井の雲、陸上に濃密な湿度を与える海のきらめき、昼夜を問わずに響いていたプロペラ機の爆音、震える翼、燃料の臭い、掘りかけの地下壕の土の臭い、土曜日のランチのカレーの臭い・・・が、圧倒的な質量をもって私たちの脳裏に鮮やかに蘇るのだ。

その姿を忘れてはならない。私たちは、あらゆるイデオロギーや欲望、懺悔とはまた別の次元で、この事実を受け止め、明日への力にしていく必要があるのではない。それは、国のために死んでいった多くの若者たちが生きた証を伝えることにもなる。

その姿を追い求めてはならない。私たちは、戦争という悲しい理由で、若者たちのエネルギーをかき集めてはならない。軍組織というあだ花が、我が国の産業技術の礎となり、高度経済成長の梃となった。その頃の技術者のほとんどは、既に産業社会から引退し、次の世代も一斉にシニアとなりつつある。優秀な若者が予科練を知らない時代である。

私たちは、戦争とは異なる手法で、明日を拓くエネルギーを結集していくべき時代を迎えているのではないだろうか。地球環境問題、混迷する社会経済の中で、明日を拓く希望を形にしていくため、若者たちが、日々自らの力を伸ばすことに没頭できるような環境をつくれるだろうか。しかも、戦争とは真逆な平和的手法で。

追浜に広がる工業地帯、それを覆うまだ生々しい戦時の幻影を眺めながら、私の目はいつしか空へと向けられた。空に散った若者が「墓標」と詠った雲が、静かに流れていた。

【注】

*1：貝山緑地

横須賀市浦郷5丁目にある。旧海軍が残した丘陵。横須賀市経済部観光課は「横須賀ロケサービス」というウェブページの中で「海軍航空隊発祥の地碑・海軍飛行予科練習生発祥の地碑がある」と紹介している。

*2：甲飛

甲種飛行予科練習生の略。海軍飛行予科練習生（予科練）の制度は、昭和5年（1930年）に創設され、高等小学校を卒業した満14歳以上20歳未満で厳しい試験に合格した者が採用され中堅幹部育成の教育を受けた（後の乙飛）。昭和12年（1937年）、さらなる搭乗員育成のため旧制中学校4学年1学期予期修了以上（後に3学年修了程度）の学力を有する満15歳以上20歳未満の志願者から甲種飛行予科練習生（甲飛）制度を設け、前記練習生は乙種飛行予科練習生（乙飛）、操縦練習生は丙種飛行予科練習生（丙飛）に改めた。昭和18年（1943年）から戦局の悪化に伴い乙種予科練志願者の中から選抜し乙種（特）飛行予科練習生（特乙飛）とし短期養成を行った。

【参考文献】

横須賀市「横須賀市史上巻」（昭和63年）、第8編昭和時代の横須賀 I

追浜地域文化振興懇談会「ふるさと追浜写真集」（平成13年）

横須賀市「目で見るとよこすか100年」（市制75周年記念アルバム）

石井明・神奈川新聞社「ふるさと横須賀（下）」（昭和62年）

横須賀海軍工廠会「横須賀海軍工廠外史」（平成3年）

海軍飛行科豫備学生・生徒史刊行会「海軍飛行科豫備学生・生徒史」（昭和63年）

その他、神奈川県、横須賀市ホームページを参照した。

本文は、横須賀市追浜行政センター館長青木猛様の監修により、上記以外の資料及び現場検証に立脚した事実関係の精査、用語使用の正確さを得ることができた。

また、日産自動車追浜工場にも、ゲストルーム遠山様を介してご確認いただいた。

ご協力いただいたすべての皆様、亡き父に感謝する。

2009年11月

近代産業遺産アート再生学会活動報告ブログより（堀越分）

■ 追浜貝山地下壕見学記 ～地下壕天井の貝化石から教えてもらったこと～

横須賀のインディージョーンズこと、追浜行政センター館長の青木様のお声掛けにより、昨日 11/19、貝山地下壕の見学会に参加してきました。太平洋戦争末期、海軍航空技術工廠の避難施設として掘られたもので、昨日はその一部を案内していただきました。見学隊は、横須賀市観光ボランティアガイドの会、追浜探検隊（?!←不正確）の講座卒業生の方々とともに数十名規模でした。

追浜の貝山、夏島、鉾切山、金沢区の野島には大規模な地下壕跡が残っています。この日見学させていただいたのはその一部（に過ぎませんが、1時間以上の行程でした）で、会議室、竈などの生活空間を含むエリアでした。少年兵を含む多数の人が集められ、大急ぎで造られたとのことですが、美しいアーチ型の通路や部屋の壁には、ノミで削った無数の跡が残っていて、丁寧な仕事ぶりがしのべられます。それは、激しくなった戦火に追いやられた苦渋の姿であり、まして作業に携わった人々にとっては、その先にどんな未来があるのかわからず汗を流した現場だったはずで

す。地下世界には、工場、研究、備蓄、格納、病院等総合様々な機能が広がっていました。それはまさにパラレルワールド。戦後はすっかり忘れさられ、世間から遮断された異空間としてノミ跡も鮮やかに残されたのでした。見学者のお一人が、天井に美しい扇貝の化石を発見しました。径8cmほどの白く完全な姿で、つい最近まで生きていたのではないかと見えるほどの存在感です。「貝山と言われる由縁ですね」とその方がおっしゃいました。地層に封じ込められていた長い時間が壕掘りによって蘇り、戦後ふたたびまどろみに入っていた中で、この貝はずっと何を見つめてきたのでしょうか。そして、この天井を掘った若者たちは、どうしてこの貝を天井に残したのでしょうか。

追浜は、当時の日本の海軍航空技術開発の中核で、そこで生まれた技術は後に新幹線、モノレール、現在まで日本の産業を牽引してきた輸送機器製造業の礎となりました。私たちが記憶の中に封印してきた時空の中で、生まれ、育まれ、手渡されてきた技術、日本人のクリエイティビティに光を当てようとしている人々がいます。私が知る限り少なくとも追浜・横浜、阿見、小牧に。血と汗と涙の痕跡、風化しつつある記憶に刻まれた生命力、彼らが掘り当て、そして残した貝化石。

我が父の青春を探す旅を続けるうちに、厚い霧が少しずつ晴れるように予科練の群像が浮かび上がってきています。その群像の中にあるはずの父の輪郭は、依然はっきりしません（父自身も自分の姿をきちんととらえられる環境になかったからかもしれません）が、戦争が、日本人の気質を極端な形で引き出し、異常な環境の中で次の時代につながる何かを残してきた群像があったという事実、その事実を後に伝えようとしている人々との出会いが広がっています。そのネットワークを育む必要があると思うようになりました。予科練時代のことを全く語らなかった父のおかげ、壕天井で悠久の時空を見つめてきた貝のおかげです。 2009. 11. 20 Friday

■ 近代化遺産／近代産業遺産をめぐる情報の畔で

先日（12/16）の「日本の技術革新」シンポジウム会場で出会った方から、近代化遺産関連の貴重な資料情報をいただき、正月読むのを楽しみに取り寄せようと思いました。

ところが、アマゾンにも横浜市立図書館にもない資料が多いのです。

近代化遺産には、最近注目が高まっており、組織的・学術的アプローチにとどまらず、観光や趣味活動の対象にもなるなど、いろいろな形で情報が出回るようになってきていますが、社会・地域の一部として認知されるために必要な情報は、まだ不足している…あるいは、情報があってもまだまだ霧の中にあるということでしょうか。

ご紹介いただいた本たち、ないとなるとかえって読みたくなり、行きつけの本屋さんに注文しようと考えています。その時、この手の書籍がどう動いているか聞いてみるのも楽しみです。

とはいえ、近代化遺産への社会的関心は確実に高まってきており、地域活性化、日本の付加価値化につなげていくにはよい流れになってきているようです。

私に資料情報を教えてくださるその方は、企業で高度技術開発（物質系？）に携わられ、今は国立大学で教鞭をとられておられます。「私は技術革新を多面的にみようとしています」と仰せなのは、何とも心強いことです。

ご紹介いただいた中に、エドウィン・チャドウィックに関する本もありました。「チャドウィック報告」は、科学的分析（公衆衛生）を社会制度の革新へと導いたことで有名です。科学技術・産業技術と社会システムは不可分（運命共同体）であるということがいまさらながら実感させられますね。近代化の歴史には、両者の関係がおそらく今以上にわかりやすい形で存在しているのではないのでしょうか。

横浜市立図書館の蔵書の中に、大成建設さんが1998年に制作された「ニッポン近代化遺産の旅」というVTRがあるのを発見、それに誘われて大成建設さんのライブラリにお邪魔すると、より豊富な情報があることがわかりました。

建築学系の人や組織は、近代化遺産に最も早くから着目し、豊富な情報を蓄積されているだけでなく、保存・活用の現場を担う最重要部門を担われてきました。そしてその過程、姿を広く知らしめる努力もし、実績を挙げられてきました。ウェブ上でその一片を拝見するにつけ、情報技術の革新に対する感謝があらたになります。

大成さんのライブラリの中で、映像資料制作に参加なさったイラストレーター、南伸坊さんの言葉を発見しました。

「近代化をなしとげたのは、当時の技術者達の悲壮な使命感や向上心であるよりも、無我夢中の充実感と好奇心だったろう。と私は思う。」（大成建設株式会社>ライブラリー>「ニッポン近代化遺産の旅」紹介文より抜粋）

私も、まさにそう思います。戦時に技術の現場を担った研究者・技術者も含め、常に「現場」を担う人たちはそうだったのではないのでしょうか。

まさにその視点で、豊富にあるに違いないが、まだまだ霧の中にある近代化遺産、近代産業遺産情報の畔に立ち、そこにある光をとらえ、未来へと手渡していきたい。どうやら同志は多そうです。

日々の仕事に追われる身、しかも、貧しい小さな目で、できることは限られています。産業の文化化を通じた日本の価値化、地域活性化につなぐ努力には、まだまだあの手この手が必要。

猫の手としてできることを探そうと、湖畔に佇む痩せた猫の心境です。（2009年末に寄せて。堀越）

2009. 12. 29 Tuesday

■ 戦艦三笠で「秋山真之と正岡子規」展を開催中

標記は、先月 11 月 29 日から来年 5 月 9 日まで開催中の特別展。NHK で放映中のスペシャルドラマ「坂の上の雲」に合わせ、主人公の郷里である松山市とも提携したイベントです。

12/19 土曜日に訪れてみましたが、それほど混んでもいなくて、ゆっくり楽しむことができました。

秋山真之は、日露戦争で東郷平八郎らとともに戦艦三笠に乗り込んで参謀の一人として活躍しました。正岡子規は、真之の竹馬の友であり、学生時代は文芸でも切磋琢磨した仲。真之が船上から打電した「天気晴朗ナレドモ波高シ」の名文は偶然ではなく、高い文学的素養に裏打ちされたものでした。真之に限らず、当時の軍人は文化人、教養人でもあり、優れた分析力と判断力、強い意志の力を戦闘に傾けながら、その裏では、戦禍に対する苦渋、人生に対する思慮も同時に深めていたのではないかと想像されます。

展示内容は、二人の人柄、人間的な希望や苦悩をしっかりとらえ、取り巻く人々の生き方にもふれた、極めて人間臭いものとなっており、軍艦の中にいることを忘れそうになります。

呉越同舟という言葉がありますが、現在の記念艦三笠の内部は、戦争と文学、武器とペンという両極のイメージにあるものを同居させ、人間の感性の幅の広さ、悲しさが凝縮されたような空間になっていると感じられました。

戦艦三笠は、時代に翻弄された船でもあります。バルチック艦隊を破った花形艦も、戦艦の大型化・高度化の進展により引退、やがて荒廃していきます。特に第二次世界大戦後は操舵機能も戦闘機能もすっかり取り払われ、一時期はダンスホールと水族館の土台になっていたこともありました。その後、関係者の涙ぐましい努力によって復元し、横須賀港に記念艦として蘇ったのです。周辺は三笠記念公園として整備され、隣は学校と遊覧船乗り場、対岸には間近に米軍基地の生活ゾーンを望むのどかな立地です。

2 時間ぐらいかけて観覧すると、戦争と平和、希望とどうにもならない苦渋、それを同居させている人間という勝手な生き物の愚かさとかかわいさをぎゅっと感じるができそうです。(2009. 12. 21. 堀越)

■ 「日本の技術革新」シンポジウムに行ってきました

昨日（12/16）、上野の国立科学博物館で開かれた標記シンポジウムに行ってきました。文科省科研費特定領域研究として、国立科学博物館が5年間取り組んできた、技術革新史情報の体系化事業の総まとめシンポジウムでした。欧米では国の事業として古くから進められてきた技術情報の収集・整理・蓄積作業が、日本では著しく遅れており、この事業はその推進上極めて重要なアクションであったことが、素人目にもよくわかりました。

事業仕分けの嵐にさらされ、この先の展開は不透明ながら、主催者の産業技術史資料情報センター参事の清水氏は、「来年度は成果が社会に知られるようやっけていきたい」と宣言なさいました。

途中、シンポジウムのパネリストの中に、「技術情報の収集、発展史情報の社会化では、芸術活動との接点も重要」との発言もありました。この点で、当学会との接点もありそうです。

ちなみに、清水氏とこの情報センター、そして「日本の技術革新」プロジェクトは、将来に向けての道しるべとして現在社会とのコミュニケーションを大事にしており、国の近代化産業遺産活用33ストーリー形成の推進者でもあります。生糸産業史をたどる中では、自ら蚕を飼育したとのこと。この実証主義的なスタンスは、当学会とも共通しますね。この日のシンポジウムもかたちだけではない、非常に充実した内容でした。

質疑応答の時間に、私も一つ質問させていただきました。近代産業遺産活用関連の調査等を進める中で、戦争・軍需がその後の日本の高度成長を支える産業形成の礎となったことが見えてきたが、産業技術史上から戦争が欠落していること、そして、戦争に代わる今後の起爆剤には何があるか、ヒントをいただければと。

回答は明快で、欧米では戦時も避けずに連続的な形で技術史が迎られてきたが、日本では難しかったとのこと。今後の技術革新の起爆剤については、その後の発言者のご発表や、他の参加者の方との休憩時間での語らいの中で、「一つではない」ということが確認されてきた次第です。

地球と社会の将来については、楽観論、悲観論の双方が出されましたが、未来を考えるには過去を振り返る必要がある、その際には学際的にとらえていく必要がある、日本が生き延びる上で技術は重要、産業文化としての価値づけが重要、という認識は壇上と参加者（70～80名）の共通認識と感じられました。（2009.12.17.堀越）

■ まちと海と地球の出会い ～続・追浜幻影～

横須賀のインディージョーンズ（横須賀市追浜行政センター青木館長）に誘われて、昨日（1/21）、「追浜カフェ」という集いに行ってきました。

独立行政法人海洋研究開発機構（JAMSTEC）が、地元追浜の住民に話題を提供するサイエンスカフェで、追浜ワインを飲みながらの和気あいあいとした集いです。

仕掛け人は青木館長。昨年から隔月で開催しているとのこと。

今回は6回目で、長年海洋エネルギー利用技術（波浪発電装置）の開発に携わってきた方と、地球内部の研究をしている方のお話。ワインもお話も、美味でした。

JAMSTEC（かつての海洋科学技術センター）は、追浜の旧海軍航空衝跡地内の施設の一つで、水上飛行艇を開発していた施設の跡地に立地。現在も世界トップレベルの研究開発分野を何本も持っている貴重な研究機関です。

波浪発電装置の開発は日本からはじまり、2004年に装置製造マニュアル整備までこぎつけたとのこと。現在のテーマは凍結状態にあると聞き、残念に思いました。

地球内部の研究も、日本は他をリードする研究実績をあげています。

陸と海は、地殻の組成・構造がまったく違うのだと知り、驚きました。海は重く密度の濃い玄武岩系、陸はそれより軽く密度の洗い安山岩系岩石の上に乗っかっているそうです。伊豆～マリアナにかけての海嶺の下では、マグマの噴出によって一度解けた玄武岩から軽い物質が浮上して安山岩になろうとしている、すなわち陸になろうとしているとのこと。重たい残渣が残ってその下のやや軽い部分と逆転しようとして対流が起こっているらしい……。地球内部研究チームは、その物語を聞きとる研究をしているといえます。壮大な話ですね。海洋は、地球をいわばCTスキャン（地震波を測定）するのに都合のよい場所とのこと。追浜のまちと、海と、地球の、具体的かつ建設的な関係をかいまみた一夜でした。

地元で立地する施設から発せられる新鮮な科学・技術情報を、まちの人たちも知り、語り合えるという幸せは、海軍時代には決してなかったものでした。

ちなみに、地球内部研究の巽先生は、どうやら関西の方で、壮大なお話を面白おかしく話すセンスもバツグンでした。 2010.01.22 Friday

■ 月日は百代の過客にして ～夏島の貝が見つめた1万年の物語～



本日、3月28日、横須賀市追浜で、「夏島貝塚発掘60周年記念シンポジウム」が開かれました。横須賀市教育委員会生涯学習課主催、追浜行政センター共催、明治大学博物館後援。午前中に行政センターで行われたシンポジウムには、150人近い聴衆が集まり、午後には実施された夏島貝塚見学会には、それを上回る数の人々が参加しました。

縄文貝塚のある夏島は、国指定史跡で、普段は入り込むことができません。公開されるのは数少ない見学会に限られ、今日の集いを知った市民や関係者など、夏島に熱き想いを寄せる人々が集まったのでした。

シンポジウムは、我らがインディーこと行政センター青木館長（スーツ姿でした）のあいさつで幕を開け、横須賀市教育委員会生涯学習課学芸員野内秀明さんが基調講演「夏島貝塚・夏島砲台・夏島機銃砲台・横須賀海軍航空隊地下壕について」で、夏島の歴史をビジュアルかつ具体的に解説、明治大学の杉原先生（地理学）による「縄文時代の古環境調査」報告も加わり、手際良く夏島を解体していただいた感がありました。

これに次ぐ座談会「夏島の過去と現在、そして未来」では、明治大学名誉教授大塚初重先生、横須賀考古学会会長川上久夫先生が、60年前の夏島貝塚秘話を語ってくださいました。当事者のお話は生々しく、当時の若き学者、学生のワクワク、ドキドキ感が伝わってきました。NPOアクションおっぱま理事長の昌子住江先生、市生涯学習課の佐藤明夫さんのお話からは、史跡・近代化遺産をまちづくりに活かすことへの想いが伝わりました。スピーカーに共通していたのは、夏島の歴史的環境を保全し、未来に伝えようという熱い想いと、それを進めるのは市民の力というメッセージでした。

午後の夏島見学会には、ボランティアガイドに飛び入り参加して、青少年から高齢者まで幅広い年齢層の参加者の方々とご一緒しました。夏島は、発掘時は草原だったとのことですが、米軍接收時代から今日まで、自由な立ち入りが許されず、今は樹木にすっかりおおわれています。昭和19～20年につくられた地下壕（素掘り）が地下にはりめぐらされていると言われても、外からは想像ができません。

写真左は、中腹にひっそりと、瀟洒な姿を現れた砲台跡。「眠れる森の美女」の城のように見えます。写真中央は、通信塔でしょうか（聞き洩らしました）。見晴らしがよかったはずの山頂に立っているのですが、現在は隣の木に背丈を追い越されています。天空の城ラピュタを思い出しました。写真右（下かも）は、縄文時代の貝塚の貝。時代によって貝層の貝はカキ、ヤマトシジミ、またカキと変わっているそうです。わかりにくいですが、写真の中の右のほうに見える白い大きなカキ殻と、左方向にころがっていた現在のカタツムリの殻を一緒に写真に収めました。

周囲を海と工場に囲まれたラピュタ城、夏島。その美しさは時代に翻弄されて複雑です。

この貝たちは、夏島の上で1万年近い長い時間を過ごしてきました。黒船が来て、明治期の砲台跡がつくられ、太平洋戦争で機銃砲台や地下壕がつくられたのは、大きな変化でしたが、貝たちが過ごしてきた時間の中ではほんの一瞬だったはずです。長い長い星霜の中で、現在の私たちもまた通り過ぎる旅人。横須賀市の方から「保全・活用で野島に先を越されている」といった話がでましたが、野島、夏島、貝山は、トライアングルを成す位置からともに時代をみつめてきた同志です。市の境界で分けて考えるのは、くっついているからこそ価値のある二枚貝を引き裂くことにも似ています。

夏島の歴史的環境は、保存・活用には難しい条件にあるといわれます。切り崩された崖に囲まれ、崩落の危険があること、工業地帯の中で企業に囲まれており、交通アクセスも不便な条件にあること、貝塚、戦争遺跡と

いうともすると相反する要素を含むこと…ということでしたが、もしかしたら、私たちの中にある思い込みのバリアこそ、最も高い塀になっているのかもしれない。 2010. 03. 27 Saturday

■ 「これはスタートです」 第1回 Y フェスタ追浜直前、インディージョーンズかく語りぬ



明日3月20日は、「第1回 Y フェスタ追浜」が開かれます。

写真上左で、フェスタの幟と、同時開催のあんずまつりの幟に囲まれているのは、我らが「横須賀のインディージョーンズ」こと、横須賀市追浜行政センター青木館長です。準備に大忙しの中、写真撮影と独占インタビューに成功しました。

館長肝いりのこのフェスタ、パレードにはじまり、舞台あり、ワンデーミニ博物館（旧海軍関係＝貝山地下壕等）ありで、最後は冬の花火（県内で一番早い花火とのこと）という充実ぶり。地元商店街や多くの市民活動団体の参加によって実現した、地元発のイベントです。

ここは貝山公園の入り口。青い作業着姿でほほ笑むインディージョーンズの右側に続く道を上っていくと、有志が建立した予科練記念碑、追浜のイメージを担うあんず樹林があります。そのうちの一本が丁度満開でした。明日はもっと咲くことでしょう。

目を転じると、深浦湾を望む工業地帯（旧海軍技術工場研究所あたり）では、現役の工場からモクモクと蒸気が上がっていました。技術工場時代の技術は、土地と人を介して現在に引き継がれているのです（写真左下）。

追浜行政センターに戻り、写真右下は、入口に展示されている海軍関係の遺物。軍関係のものは敗戦時にほとんど処分されましたが、地下壕の中などにわずかに残っていたものを、インディーや市民が発見し、展示しています。遺物ハンターの中には、高校生の少年もいるとのこと。

ガラスケースの上は、実用化に向けてここで試験運転されていた戦闘機の写真。この地からたくさんの技術が開発され、研究者・技術者とともにやがて全国に飛び火していったのです。

準備で忙しいインディージョーンズこと青木館長ことに、Y フェスタ追浜への想いをうかがいました。

聞き手「これは、館長にとって一つの総まとめですか？」

インディー「いえ、これはスタートです。街は、誰か（特定の個人がひっぱって）つくるのではなく、それぞれの人がつくるもの。私は、そういう人々の思いや力を結集する接着剤、狼煙として、声かけしているだけです。勇気づけ、スタートで結集できれば、自分たちの街は自分たちでつくるという歯車が回り始めるはず。みんなの参加で、その歯車は多少の困難にも折れない、鉄の歯車になっていくはず。そのスタートで、色々失敗したっていいんです。失敗を恐れない勇気が大事だと思っています」

地域づくりは足元から。フェスタの成功を祈っています。 2010. 03. 19 Friday

■ 横須賀田浦に旧海軍跡を歩く。科学と煉瓦、鉄やコンクリート、そして夏ミカンの木の話



横須賀は、明治期から首都と直結した軍事基地として軍港だけでなく、関連技術の開発・製造、訓練、通信等を備えてきました。

2月下旬のある日、その一部、旧海軍工廠造兵部が立地していた田浦あたりを、知人に案内していただきました。

旧海軍工廠は、追浜・金沢からさらに東に広く広がっています。

写真上左の東芝ライテック工場も、旧造兵部の一部。この辺りでは明治19年から水雷製造が始まり、36年から横須賀海軍工廠造兵部になりました。やがて関連の無線通信・電話機・有線・鍛練・製缶・木工等の製造・修理・技術開発が行われ、多種多様な技術が育まれました。塀は明治期のものか。一帯には当時の面影を残す施設がまだ残されています。

上中央も旧造兵部の一部、現在の海上自衛隊第2術科学校の外堀。横浜積みと言いましたっけ、端正な石積みがとてもきれいです。資料室には、全国から寄せられた関連資料、教科書、設計図等に交じり、芥川龍之介（旧軍で英語を教えていた）のコーナーもありました。

上右は、JR横須賀線田浦駅周辺の七釜（しっかま）トンネル。昔、鎌を失うほど草が繁茂していたことから、「失鎌→七釜」と呼ばれることになったとのこと。トンネルは3つ連なっており、真中が明治22年の開通時、右の上り線用は大正3年の複線化時、そして一番左は昭和18年に軍需輸送用引き込み線としてつくられました。現役を引退した今、再び草に占領されつつあるようにみえます。

下左は、田浦梅園。丁度梅がきれいな時だったので足を伸ばしました。梅園は、昭和天皇と同年のこと。最近では、収穫された梅でワインなどがつくられ、地元ブランド品として売られています。

下中央は、田浦梅園の頂上に開けた広場にある夏ミカンの木。60年ほど前、ある母親が植えました。昭和16年に出征し、18年に外地で戦死した長男。しかし届いた木箱には青年の名前だけが入っていたそうです。母親は、一番よく海が見えるところに夏ミカンの苗木を植え、90歳を過ぎてもなお毎日木の下から海を眺め、息子の帰りを待ったそうです。この日は、ボーイスカウトの子どもたちがこの木をしばらく囲んでいました。

下右は、水道道を示す旧海軍の標識。道路が舗装されるごとに盛り上がってしまいましたが、波模様と「海」という文字の下にはおそらく「軍」の文字があるのでしょうか。三浦半島では、近代産業や軍を支えるため、明治期から遠く相模原方面から水を引いていました。その水道道が、横浜、逗子、横須賀にはまだ随分残され、現在ある水道の基礎ともなりました。半原から50km以上、重力だけの無動力で水を引いたという話を聞いて驚きましたが、当時の国土利用における壮大な発想と優れた科学力がうかがわれます。

三浦半島には、鉄とコンクリート、そして、火薬臭い歴史と並行して、有史以前からの里の暮らしがあります。梅の花とミカンの木は、戦争という暴力、そして、産業技術が拓くモノたちが、里の暮らしの優しさを壊すことのないよう、私たちを見守っているようでした。・ 2010.03.19 Friday

■ オペラ「ニューツーリズム」 ～最近の3つの集いが奏でる物語～

「ニューツーリズム」という名のオペラが存在するわけではない。

3 / 3 ~ 4 観光・集客サービス産業創造フォーラム 2010 (主催: 経済産業省 / 株式会社 RPI)

3 / 6 三浦半島まるごと博物館連絡会フォーラム 2010

(主催: 三浦半島まるごと博物館連絡会 / 神奈川県横須賀三浦地域県政総合センター)

3 / 1 1 近代化産業遺産を活かした街おこしセミナー (関東)

(主催: 経済産業省 / 財団法人日本立地センター)

上は、私が最近参加した3つの集いである。それぞれの集いは、リレーイベントでも何でもない。全く別々にそれぞれの都合で開催された、年度終わりの成果発表会のようなものであるが、因らずして共通点が多く、あたかも一つの主題に基づく3幕のオペラを観た後のような感じなのだ。

第1幕は、経済産業所が補助する着地型観光集客サービスビジネス化事業の成果披露の幕 (私は主催者側の一人として裏方をしていて)、2幕目は三浦半島地域のエコミュージアム系団体の活動成果披露の幕、3幕目は近代化産業遺産活用に関する調査結果と活用事例披露の幕。

3つの幕には共通して「ニューツーリズム」「観光まちづくり」「地域資源」「地域活性化」「交流」「観光客ニーズの変化」「地域の多様な主体の参加」というキーワードが使われていた。

これらは切っても切り離せない語群であり、「観光客のニーズは変化し、マスツーリズムは限界を迎えている。地域資源を発掘して観光に活かそう、地域そのものを観て、体験してもらおう。多様な事業者や住民の参加、交流の拡大により、地域活性化を目指そう」という主題となって、イントロやクライマックスで必ず登場する。我々地域プランナーにとっては、四半世紀以上前からバイブルのように、通奏低音のように、骨身にしみついた思考体系であるが、現在あたためて、地域づくり、観光の「新しい流れ」として熱く語られるようになってきている。オペラ「ニューツーリズム」は、様々なプレイヤーが様々な豊かな物語を、日本各地で花咲かせている。そんな時代になった。

ところで、「ニューツーリズム」という言葉の対義語は、オールドツーリズムではなく「マスツーリズム」である。これはいかにもサプライサイドのとらえ方であるが、旅をする側からすると、観光の旅はいつの時代でも自分にとって新しいもの、あるいは自分を新しくするものであるに違いない。

その中で、産業遺産 (戦時や高度成長期も含めたい) と対話する旅の特殊性に気がついた。

産業遺産は、単なる歴史ではなく、現在の生活や産業をつくってきたものの正体であり、かつての自信と汗、富と犠牲の気配をまだ生々しく封じ込めたエネルギー体でもある。そこから懐かしさ、誇り、技術情報等を汲みあげることが、日本、地域、そして自分自身の来し方を振り返ることにほかならない。これに呼応するエネルギーを、今、自分たちは、この国は、持っているだろうか。

産業遺産との対話は、いわば「レ・ツーリズム (※ここでの造語です)」。産業遺産は、現代という時代と自らを、壮大な時間軸の中に振り返る導入口としてまさにふさわしい。

それは、自分がいかに自分を振り返る勇気を持つかを確認する場ともなりうる。きちんと時代を振り返り、そこから自信とエネルギーをつかみ上げたら、それを次世代に伝えていけばよい (それは、私たち大人の責任でもあると思う)。産業遺産 (とそれを語り次ぐ人!) の持つリアリティが、過去と現在と未来をよりよく結び付けるヒントを与えてくれるだろう。

いざ、産業遺産の旅、「レ・ツーリズム」に出よう。

時代をつくってきたのが一人ひとりの個人であることを、確認する旅に。

私が今回観た3幕のオペラは、「ニューツーリズム」という主題が、日本の産業を元気にするためのタイムトラブル、「レ・ツーリズム」という形で展開し、今後への余韻を残しながら幕を閉じた。

貴重なご報告、ご講演をご提供くださった各機関、スピーカーの方々への敬意と感謝を新たにしている。

2010.03.12 Friday

■ 追浜サイエンスカフェに行ってきました ～今回の主役は「ピカソ」?!～

今年度最初の「追浜カフェ」を、4月15日(木)17:30~19:00、追浜行政センター分館で開催します、深海生物追跡調査ロボット「ピカソ」がテーマです…うれしいニュースを、追浜のインディージョーンズこと追浜行政センター青木館長からいただきました。

「追浜カフェ」は、横須賀市追浜行政センターが、独立行政法人海洋研究開発機構(JAMSTEC)と連携して開催しているサイエンスカフェ。前回の開催は、1月21日、波浪発電の話と、地球内部ダイナミクス研究(いわば地殻ハンター)の話で、とても興味深かったということをここでも報告させていただきました。

今回の主役は、深海生物追跡調査ロボット「ピカソ」と、その開発者であるエンジニアの吉田さん。

「ピカソ」は、深海の生物調査を目的に開発された小型の無人探査機で、ハイビジョンカメラや実体顕微鏡(ビジュアル・プランクトン・レコーダー)等を備えた小型の無人探査機です。

深海のプランクトンは、捕獲して陸上に挙げると死んでしまう。それを、生体のまま観察できる、しかも、コンパクトなので、漁船や浮き輪ボートなどで運べる便利な優れモノ。この分野のサイエンティストの良き相棒であり、ピカソ軍団をうまく利用すれば、魚を追いつめ込むなど漁業等への多角的な利用も可能です。今後は、地球温暖化や海洋環境観察にも役立つ方向にあるとか!

産みの親である吉田さんは、「画家のピカソのように、新しい見方で周りを見ることを目指す」という想いをこめて「ピカソ」と名付けたそうです。「ピカソ」が撮影した深海のビデオを観ると、確かにそこは、小さくて不思議な生き物が描くアートの世界。ミクロの幻想に誘われます。

ピカソは、今後も未知の世界を見、未知のデータを私たちに届けてくれることでしょう。

今後は、ヒトの視覚認識の機能をうまく「ピカソ」にプログラムして、「個体の追跡」もできるようにしたいという吉田さん、夢をいつどんな形でかなえていられるか、それも楽しみです。

研究費の確保が難しくなっていると聞かれました。「ピカソ」の進化が続くことを祈っています。

なお、5月22日は、JAMSTECの一般公開日とのこと。普段みられない海洋調査船にも体験乗船できるとのこと。JAMSTECのURLはこちら↓。一般公開のニュースも載っています。

<http://www.jamstec.go.jp/j/>

ピカソとは何か、どんな姿をしているか、詳細はこちら↓ ちょっと探しにくいようなので。

<http://www.jamstec.go.jp/jamstec-j/PR/0703/0319/index.html#3>

2010.04.16 Friday

■ 技術とアート、その運命的な関係を見つめる

人類、あるいは人と自然の関係の来し方行く末、そのダイナミズムを把握するにはどうしたらいいか……少女期の私は、歴史学、民俗学からヒントを得ようとした。いわば、時系列的分析からその先をシミュレーションしようという帰納的発想である。時はまだ高度成長期。豊かさと同時に、公害、過疎過密等々の問題の進行がみられた。私を取り巻くささやかな生活環境の中でも、家電や自動車が増えたが、周辺の農家の男手が工場に呑み込まれていくなど、可視的な変化がみられた。指揮者の指揮棒のように変化をつかさどるのは「経済原理」ではないかと考え、法則性そのものと向き合おうとする、いわば演繹的分析の視点が加わった。

そこで、民俗学と経済学の双方から「来し方行く末メカニズム」にアプローチしたいと考え、大学も仕事もそれで選んだ。子育てに入って、子どもとともに社会参加するうちに、参与観察による分析素材が爆発的に増え、様々な仮説を立てては社会現象の分析を楽しんだ。一方で、経済原理や統計的アプローチだけでは説明しつくせない社会現象がある、否、社会現象の理解は、科学的分析に頼るだけでは全く不十分という実感も強まった。分析ツールとして社会学なども摂取しはじめたが、やはりどうしても追時間的分析を基礎とせざるをえず、経済学同様のポジションにあると思った（今も大事なツールと思っているが）。

やがて、感情、インスピレーション、感性、決断といった「人を突き動かす瞬間」というものの正体を見極めたいと思い、その面白さに気がついた。これらは人間の脳という、おそらくきっちり統合された情報体系としては世界最強のものから、時間の最先端で噴出するゲリラ的化学変化であり、命のほとぼしりそのものともいえる。私は、統計データが示す情報の世界の中で、その結果がサンゴのように固まった後の姿を眺め、楽しんできただけなのかもしれない。このゲリラ的化学変化こそ、最も先鋭的な世界であり、そこに、アート、そして、様々な発明や発見といった創造的現象がある。その場所で、アートと科学は、二枚貝のように人間の文化を拓くパートナーとして存在する。そのどちらが欠けても、現在の私たちの生活は成り立っていないのではないかと。

「戦争と産業技術」というテーマに、アートは欠かせないと感じたのは、そんな認識がまさにインスピレーションとして、私の頭の中にゲリラ的に噴出したからかもしれない。

実は、このコラムは、「技術を創造する要素」というタイトルで書き始めた。それがまさにゲリラ的に、科学とアートの関係論に発展してしまった。

技術創造の要素についての考察は、軍事技術と産業技術のキャッチボールについて把握を進める上でめぐりあった一つの論文からインスピレーションを受けた。故富田徹男博士という方が1991年6月の週間東洋経済誌に寄せた「日本の技術の強さは気候耐久力にある」という稿である。博士は、1934年のお生まれで、学部では物理学、修士課程では日本史・東洋史を学び、物理食として特許庁に入賞、退職後弁理士登録、大学の経営学系講師を経て、国際地域学部教授となられた。1999年に「技術の需要に雄代ボス市場構造及び風土環境の影響に関する実証的分析～技術経済学への経済地理学の導入～」というテーマの論文で学術博士となられており、東洋経済掲載の時期をみると長く温められたテーマであることがわかる。故人の長い研究史の結集の一つがこのテーマではなかったかということがしのばれる。

博士から受け取った示唆は、技術発展条件としての気候条件の重要性であり、それは物理的な環境条件とともに、気候条件に立ち向かう社会経済的環境（特に経済力）を含めて総合的に測られた時はじめて技術として社会化するという認識である。

技術創造を支える要素として、自然環境、社会環境、よりよく生きようとする社会的欲求、経済力、開発・製造に必要な物資・技術・知識、そして、個人のインスピレーション、それらをつなぐチームワーク・組織力が挙げられるだろう。それらが一式統合されるのが、開発の「現場」である。

戦争は、極端かつ異常な資金・人材・物資集積契機として突出したものであるが、資本・技術を組織的に結集させる習性は、有史以前からの人間の性であり、理不尽な形で資本・技術結集は、いつの世でもどこの社会でも、そして現在も、むしろ、よからぬ魂胆が往々にして技術発展の大きな原動力となることが多い。平和に見え

る現在も、日本のどこかで軍事に供される技術が、意識的・無意識的に開発・生産されているのである。その点で、戦時を特別視する必然性は薄い。

戦争という不幸かつ理不尽な環境の下でも、技術開発の現場では、若い人たちがインスピレーションを噴出させていた。創造された技術は、戦争中あるいは戦後に実用化・検証され、人から人へとリレーされた。インスピレーションの連鎖もあったはずだ。環境条件としての市場原理、軍や企業といった組織の目論見と並走して、そのような目論見の影響が及ばない世界が技術開発の現場にあり、そこには個人の知的探究心、インスピレーション、チームの信頼関係といった自由で豊かな世界があったことを信じたい。

貝山地下壕の天井に白い扇貝の化石が残されていることを以前報告したが、それを削りとらずに残した誰かさん、あなたの衝動を受け止めたい。それは、確かにアートである。

技術者や若者、アーティストたちのシナプスが活発に活動する世界をどう守るかがオトナの最大の役割の一つであるのかもしれない。

故富田博士、博士の論文を掲載した東洋経済誌に敬意を表して。2010.04.07 Wednesday

■ 情報の海のほとりで・パート2 ～技術史を客観視するということ～

奈良から、美しい歴史的街並み、それを構成するディテールの美しさを紹介され、日本人の美意識に感動している。美しいと感じるのは、対象そのものが持つかたち、そこに込められた造り手の感性、それを被写体とした撮影者の感性、それを受け止める「私」の感性のリレー的反応によるものだろう。

先日、学会総会でお邪魔した山本能楽堂さんで、能舞台の床下に埋められた空洞の甕群を見せていただいた。憶えていないが8個ぐらいであったか。無造作に見えるが、甕の大きさ、埋める位置、角度はすべて、シテの動き、鼓の位置をはかり、音響効果を計算したものだろう。その鼓も、皮を紐でつないだだけのものが楽屋に常備されており、胴は演じるごとに装着されるという。能は、霊界と現世、有と無の際に映かせる研ぎ澄まされた美であり、物質的構築をギリギリまでそぎ落としたところに何を見せるか、見るか、シテ、舞台提供者、客の感性のリレー的反応＝文化共有に大いに依存するオトナの芸術であることを再確認した。

昨年の後半から「戦争と産業技術」というテーマに取り組みはじめたが、霧にかすむ情報の海のほとりで途方にくれている時期が続いた。最近では、地元横浜・横須賀にある旧海軍第一航空技術工廠の技術開発コア性に着目し、ここを中心に集散した技術の行方を追ってみたいと思った。親世代（戦中派）と子ども世代（戦後3世になってきている）の間にいる世代として、戦時下に行われた技術開発の姿を、客観的な情報として次世代に伝えていく使命があるのではないかと思ったのだ。

そしてもうひとつ、不遜かもしれないが、日本の技術革新史情報の中で「欠落」している戦時情報を補ってはじめて、日本はオトナとしての自己認識を果たせるのではないかと思った。技術を創造し、伝え、活用する力は「人」にある。人をいかに組織化する力を、軍が持つか、企業が持つかという違いはあるが、現場では常に、研究者、技術者、工員たちが、日々個別の課題に取り組んできたはずである。そして、その技術・技術力を戦後に引き継いだのも「人」である。一人ひとりの心境、個々の技術と人材を活用した企業の組織力学は、どう動き、どうリレーされてきたのだろう。人々も国も企業も、生きていくために、技術を活かし、リレーさせてきたはずである。そのリレーを客観視し、情報化して分析し、後世に伝えていくことはオトナの責任の一つではないか。

私のような社会科学系の人間は、技術の内容には門外漢、戦争という異常な事態を掘り下げる発意も能力もないが、人や企業による技術のリレーという点に着目した社会調査はできるのではないか。旧海軍第一航空技術工廠エリアを中心に集散した技術の系譜の姿を明確にできないか。

戦時の技術革新史という明確な情報体系はない。国立科学博物館産業技術史情報センターをはじめ、経済産業省の関係部署、産業技術総合研究所、日本機械工業連合会、主要企業の資料セクターなどへの問い合わせを通じ、個々には記録・回想録等が豊富にあるが、技術革新の系譜に特化した情報、そのような情報の整備環境を用意することはなかなか難しそうだということが確認された。

同時に、反省の念に打たれた。私は、イデオロギーやら怨念やらでコテコテだからという理由で、戦争・戦時を分析することから自らが逃げただけでなく、各機関・企業も同じように避けざるを得なかったのではないかと思ひ込んでいた。我ながら失礼、不遜な思い込みだったと思う。

諸機関による取り組みは、優先順位だけの問題だったのかもしれない。混沌たる戦時を経て磨かれた結果として生まれた技術自体及び、今見えていることを情報化していくだけでも大仕事である。それができれば、敢えて混沌たる海の掘り下げという労にとらわれる必要はないのかもしれない。

それでもなお残るのは、当時の技術者たちがお元気なうちに、技術開発の現場・経緯、その人を後に支えることになった知識・技術、そして戦後に活かした心境を直にうかがっておく必要があるのではないかということである。そこから「技術開発のダイナミズム」を汲み取っておくことの有益性は、後の判断に任せるとしても。

私は、依然として情報の海のほとりに佇んでいる。しかし、少しずつその海が、現在の日本の経済成長を産んだエネルギー体であり、多様な知識・技術・技能、国や企業が生き延びようとする意図、人々の悲しみと誇り、後悔と希望など、ドロドロしたものも清廉なものも混とんと呑み込んでいる存在であるということがわかってきた。これもまた勝手な思い込みかもしれないが、社会がその海を掘り下げるには順序があるのかもしれない（本当にそうなのかな～、私自身が気持ちを決着させているだけかもしれないが、現状認識として）とも考えるようになった。煮え切らない表現で申し訳ない。

その海にこぎ出すべきか、ほとりで佇むにとどめるのか、悩みながらウェブ検索をしていた際、軍事技術の戦後展開を含むいくつかの論文にめぐりあうことができた。

その中の一つに、科学技術政策研究所が1993年2月に発表した調査研究資料がある。「科学技術史観の認識論的基礎—知識創造と日本の技術革新・研究序説—」である。この稿は、「知識」における「暗黙知」と「形式知」の相互作用に着目し、両者が「表出化」「内面化」「統合化」「共同化」という変換過程を経ることで知識創造が成されること、科学技術史の主要モメントを技術の移転・普及・拡散による革新ないし集合革新、及び多角化であると整理している。

この整理は、科学技術、産業技術における知識創造メカニズムとしてのみならず、様々なコミュニティにおける仕組みづくりなど、社会開発の局面における分析にも適用することができる。我々地域プランナーも、常にこのメカニズムを意識して社会をモニタリングしており、いわば汎科学的アプローチであるともいえるのではないか。

どうやら、我々にもできること、しなければならないことはまだある。戦争という複雑な事態の中の、どこに着目し、どの技術を対象とするか、きちんとその範囲を定め、これを「羅針盤」に、上のメカニズム論のフレームを「櫂」に、人による人のための情報整備をするという意志を「船体」に、産業史の文化化により国とともに大人になろう、若者に自信を手渡そうという想いで「帆」ふくらませて、海にこぎ出そう。

私の目にとまった論文や書籍は、1990年代前半のものが多く、新しくても2003年前後までのものが多い（最近では、産業遺産、戦跡、廃墟といった切り口で戦時の扱いはあるが、技術革新史という切り口を持つのは、経済産業省が近代化産業遺産活用を推進するにあたってストーリーづけている情報の延長にみられるのみである。私が他に見つけられていないだけかもしれない）。

科学技術史観に関する研究がその後どう進められているのか、国の研究機関でも現在進行管理されている課題の中にはないようである。しかし、混迷する今こそ、客観的・中立的な立場から歴史を分析し、そこから知的創造の行方を考える勇気とエネルギーが必要ではないか。 2010.04.06 Tuesday

■ 現役です、東海道！① シティガイドと歩く川崎～生麦一

NPO 法人横濱金澤シティガイド協会の「神奈川県下の東海道を歩く①川崎宿～神奈川宿」というプログラムに申し込み、5月19日（水）、参加させていただいた。以下は、その参加録である。

奈良からの「大宇陀」だよりも「とんでもない発想を持ち込む」ことがあるとあるが、見た物、聞いたことから得たインスピレーションが、現実を超えて広がっていくことは確かにまます。東海道の宿場町を歩くと、そんな感覚に襲われることが頻繁にあり、愉快だ。一見して塗り替えられてしまったように見える現代的な街の中に、まだまだチョロチョロと当時の面影がくすぶっている。東海道を歩くハイカーが多いのは、かつての往来、雑踏の熱気が今も残っていて、その気配に呼ばれるからということもあるのではないだろうか。

さて、シティガイド協会プログラムの参加者一行は、京急大師線港町駅に集合し、到着順に次々と数人のグループに分けられ、ガイドスタッフに率いられて順に出発する。参加者は総勢約60名、平均年齢はおそらく60歳を超えているが、皆様このようなプログラムに参加しなれておられるのか、服装も足取りも軽やかである。シティガイドは、地元の地域に密着した活動と思っていたが、この団体の活動エリアは広い。ガイドも参加者も地元を離れ京急線に乗って約30分、東海道を川崎から生麦まで歩こうというスケール感ある企画である。ガイドスタッフの方々の研究心には常々感嘆させていただいているが、個々の知識とネットワークを総動員すると、土地との対話がよりダイナミックかつ機微に溢れた豊かな世界として広がっているようだ。参加者も負けていない。道すがらの話題は、沿道の花々から土地の歴史にまで、素晴らしい広がりを持っている。

港町駅から東に進むとすぐに、多摩川の土手に出る。「六郷の渡し」跡。今はすぐ隣に橋があるが、車で通過したらまず気がつかないところに、ひっそりとモニュメントと説明板がある。慶長五年にも架橋されたが、破損修理が続き、元禄元年には洪水で橋が流され、以来渡しになったという。

江戸幕府の交通計画、都市計画、経済政策は極めて緻密で、街道筋に設けられた宿場には、幕府の公用を支えるに足る人馬、大名が泊まる本陣、旅人が泊まる旅籠や木賃宿、一里塚等が設けられ、軍事的機能とともに、宿泊や運輸、飲食、金融に関わる業、花街、社寺等々の立地を許し、民間活力によってお金が巡る拠点としても大いに機能させたようだ。

宿場町を歩くと、今でも当時の本陣、商家、社寺等の末裔が今も現役で店を張っており、一皮めくれば当時の活気が伝わるようである。



出発視点は多摩川の神奈川県側、六郷の渡し跡。 船のモニュメントや説明板などがある。

旧東海道の宿場町をたどる。現在はほとんどの建物が建て替えられ、太い道路に分断されている個所もあるが、屋号を残す店舗等も散見される。資産家が無料で開放する美術館などもあり、豪気である。

さらに進むと旧花街が現れた。昭和30年代以降も、風俗街として現役を通してきた。すぐ隣は銀座。遊女の供養塔がある宗三寺は、本陣や問屋といった当時の公的機関（現在の川崎市役所もこの位置）からも遠くない。政治と金と色が密接なのは、土地を変え、時代を超えて共通している。都市は清濁あわせ飲むことでバランスよく栄えるのだ。川崎でも、それらは一式宿の中心に座を占め、背中合わせで手を握り合える位置にある。社寺は、その結び目を脇からひっぱったり緩めたりしながら人心と街の安寧をつかさどってきたのだろう。



左は遊女の供養塔もある宗三寺。後ろの京急線ホームと高層ビルの借景？を遊女も楽しんでいる？

右は新川堀（現在は暗渠）にかかっていた小土呂橋のぎぼし（本物）。車道からも歩道からも目立たないのが残念。

小土呂橋を渡ると、海方向に向けて新開地が広がっている。大人しい感じの商店街と住宅街は、かつて広い農地だった。八丁畷（はっちょうなわて）という地名は、八丁もの間田んぼ道が続いていた処といった意味とのこと。二毛作で、初夏には麦がなった。八丁畷の駅近くにかつては茶屋があり、芭蕉がそこで弟子と別れる句会を開いたという。弟子に対する芭蕉の返句は「麦の穂を たよりにつかむ 別れかな」。

芭蕉は、奥州街道を北上して千住で江戸と別れる時「行春や鳥啼魚の目は泪」と詠っている。かつての旅が、今生の別れに匹敵する厳しさと、だからこその情感を伴ったものであることがしのばれる。八丁畷駅のある場所には、無縁仏となった旅人を供養した塔が今もひっそりと建っている。



芭蕉の句碑の隣に理髪店の「年中 1800 円」の看板。 右は八丁畷の駅階段に寄り添う無縁供養塔。

沿道の商店街に歴史を重ねた風貌が見え隠れしてきた。鶴見市場の駅近くに専念寺がある。紫式部の持念仏と伝えられる市場観音が祀られている。富士山の噴火で飛んできたという黒い噴火岩は「夜光石」として今も祀られている。近くには京に由来するような名前の商店も見られる。勝手に想像すると、東海道づたいに京から来た人々が棲みつき、式部の都をしのんだのではないか。ちなみに、鶴見市場という町の名は、この寺の境内で市が立ったことに由来するという。

近くに熊野神社がある。平らに広がった境内は大らかで、社殿も、人が視線をあげる必要のない高さで佇み、親しみやすい。舗装していない境内も、手作りの看板（神社 HP 案内と禁止札）も人間臭くて愛らしい。今も昔も変わらずに、人とともにあり続けてきたのだろうと想像される。

鳥居をくぐる時、散歩に来ていたらしい老人が「あんたたち、ここに来て楽しいの？ わしは一つも楽しいことないよ。」と、ホントにつまらなさそうにつぶやいた。よそものにそんな風に声をかけるあなたがいるから、やっぱりこの町は楽しい。



鶴見市場の街にある熊野神社。大らかな佇まいと手書きの立て看板（内容は現代的）

商店街はやがて静かな住宅地になった。市場一里塚跡（日本橋から5番目の一里塚）を過ぎると、すぐ鶴見川がある。鶴見川橋は、日本橋を出発した旅人が最初に渡る橋だった。今はアーチ型の橋になっていて、これに沿って下水道橋が掛けられている。

橋を渡ったところに、鶴見関門跡がある。横浜開港後、外国人と日本人の争いを避けるために設けられたとのこと。今は国道1号線の裏道的な通りになっており、車の通行もまばらであるが、かつては橋詰の重要な取り締まり拠点であった。



左は市場一里塚跡。緑の幟は祭礼のものかと思ったら「よこはまはG30」と書いてあった。

右は鶴見川橋。これを渡るとすぐ、鶴見関門跡があり、その先に鶴見図書館がある。

鶴見の中心部に入った。推古天皇時代の創建といわれる鶴見神社を過ぎると、旧東海道は京急鶴見駅をくぐる。右手にはJR鶴見駅、鶴見大学、そして曹洞宗の大本山総持寺が鎮座するが、今回は旧東海道をひた進む。国道1号線を渡るとすぐ、高架が見えてくる。JR鶴見線国道駅である。

このあたりから、景色の中に京浜工業地帯としての顔が見えてくる。

国道駅は、国道1号線、旧東海道と交差する珍しい駅で、駅構造物は半世紀前から建ち続けている。廃墟のように見えるが、れっきとした現役である。駅の高架下はアーチ型の長い商店街になっており、今も魚商組合ほか2〜3営業している店がみられる。無人駅であるが、改札はまだ駅員が入って切符を切っていた木の枠が残っている。下の写真には見えないが、その奥にスイカ・パスモの読み取り機が居心地悪そうに立っている。ここは、複数の時間と空間が交差するスポットでもある。



JR 国道駅の外観（左）と内観（右）。現役です！

国道駅をくぐった先の旧東海道は、生麦魚河岸通りとなって長く続いている。古くからの漁村で、今も約80件の鮮魚店が並ぶ。魚河岸通りの途中には、生麦事件跡がある。川崎大師を見に行こうとした英国人と、島津公の行列がかちあったことで悲劇が起き、薩英戦争に発展することになったことは有名であるが、事件がおこった場所のはのかな閑村だったのだ。

汐の香が濃くなる地点（今は随分内陸だが）に、道念稲荷社・原明神社というお宮がある。江戸時代から続く「蛇も蚊も祭り」という疫病除けが今も続けられている（直近はは6月6日）。稲荷社で雄の蛇、明神社で雌の蛇をつくって絡み合わせて舞った後、かつては海に流し、今は境内で燃やす。現役の、地域の祭りである。蛇の気配を感じるとしたら、近くの公園にいた（下の写真参照）！



生麦の町にある道念稻荷社・原明神社。二社で「蛇も蚊も祭り」が行われる。

隣の公園では、モザイクタイルで造られた蛇が身をくねらして砂場を出入りしている。

道はやがて海に向かう。魚河岸通りの向こうには工場などの大きな臥体が見える。

生麦事件の碑は、国道1号線沿いに建立されている。国にとってばかりか、土地にとっても一大事件だった様子がしのばれるが、工場とJR東海道本線、京急線国道1号線に挟まれた交通量の多い幹線道路沿いであって目立たず、必ずしも足を止めやすい環境にはない。

人々は、隣にあるキリンビール工場（工場見学コースやレストランがある）の入り口に目を奪われて通り過ぎていく。

この日の歩行距離は、川崎宿から生麦宿まで約11km。こうして案内していただくと、旧東海道にはまだまだ往時をしのぶのぞき穴がたくさん残っていることがわかる。川崎市、横浜市は、ポイントポイントに案内板を立てて案内している。このようなガイドボランティア活動による情報提供もある。そして何より、上に挙げた神社ではいずれも、参拝にこられている人（地元の方らしい）にお会いした。

都市の巨大かつ雑多な構造物の中であって、それらは気をつけないと目立たない。しかし、残っている、または残そうという努力がある限り、それらは時を超えて私たちと同時代を生きる現役選手なのである。今後の旅も「現役」探しに着目して続けていきたい。

シティガイドの皆様、今後ともよろしくお願ひします。2010.05.23 Sunday

参考資料：NPO法人横濱金澤シティガイド協会作成の配布資料

■ によきによきと?! ～地上と地中を往来する旧相模川橋脚の物語～

休日にはよく、相模川を越えて大山の麓まで米や野菜の買い出しに行く。

5月半ばでも今年は冷える日も多いためか、今日もわらびを買うことができた。竹の子と春キャベツも。彼ら季節の申し子は、時期になると土から出てきて、によきによきと伸びる。



←伊勢原大山山ろくの竹の子とワラビ 5/16

によきによきといえは・・・茅ヶ崎市南西部に、国指定史跡「旧相模川橋脚」が保存されている。

一度地中に埋もれた中世の橋の杭の列が、関東大震災の地盤液状化により、再度水田に姿を現したというのである。

橋は、源頼朝の家臣稲毛重成が、亡き妻の供養のために掛けた。これを渡り初めした頼朝は、帰りに落馬し、それがもとで亡くなったとされている。今から800年以上前のことである。太い丸太の杭を川床に深く埋めた橋脚が3本4列で支える、当時としては極めて大きな橋だったという。

相模川はその後何度も流れを変え、橋は地中に埋もれた。そして1923(大正12)年、関東大震災に揺り起こされ、橋は再びその橋脚を地上に現す。水田の中に突如として直径数十センチの丸太が、によきによきと出現したのである。当時の人々の驚きはいかばかりだったか。これをいち早く歴史的遺産ととらえた歴史学者もまたすごい。歴史学者の提唱により1925年には保存工事がはじめられ(下の写真左)、1926年に保存池が完成、国指定史跡となり、「相模川の古杭」として広く紹介されるようになった。

高度経済成長期、周囲は工業地帯となり、橋脚を抱く保存池は、道路や産業施設等に囲まれるようになった。史跡への関心は薄れていき、保存池ではゴミの投げ込みもみられたという。保存管をかぶせられた黒い橋脚の姿を、地域住民はよく記憶している。

今から10年前、史跡では再度の調査・保存・整備が進められることとなった。

現在、橋脚は再度地上から地下へとその居場所を移している。下の写真右は、橋脚のレプリカと新たに整備された保存池の姿である。かつての橋とほぼ同規模につくられた保存池の下には地下空間があり、腐食止めを施された本物の橋脚が大事に保存されているという。

復元池は、桜の木に囲まれ、春には花見の名所にもなる。説明板もいたれりつくせりで、ゴミ一つなく美しく整えられている。橋の墓場と見えないこともない。が、水面に美しく空とレプリカ橋脚の姿を映す復元保存池の下で、橋脚は今も虎視眈々と空を目指して立ち続けているのである。

そこには、中世に威風堂々とその役割を果たしてきた橋と、それを渡った頼朝や鎌倉時代の人々、そして、一度埋もれた橋が再度姿を現したとき、その歴史的意義に気付き、これを保存しようとしてきた大正・昭和・平成の学者、技術者の想いつまっている。

地元自治会の方が、橋脚と復元池の写真撮影に来ていた。

時代の中で地下と地上を往復してきた橋が、今後も人々の記憶の中で生き続けることを願う。

2010.05.17 Monday



■ 望郷の気配、人の想い息づく里 ～シティガイドと歩く田浦～按針塚～

6月5日(土)、再び「横濱金澤シティガイド協会」のプログラムに参加した。

今回のテーマは「田浦の歴史をたどる(港に沿って敷かれた鉄路)」。この副題に惹かれた。

2月下旬に実施予定だったプログラムが雨で中止となり、今回は仕切り直しプログラムとなったが、実は2月当日、何人ががせがんで、雨の中を個人的に案内していただいた。そのようすは、このブログでも報告させていただいた(3月19日付)。

今回は、天気にも恵まれ、総勢約50人、初夏のさわやかな旅となった。

京急田浦駅から少し歩くと長浦湾とその周囲に広がっていた旧海軍施設群がある。追浜・金沢の航空技術廠、汐入方面の軍港に挟まれた、一大軍事施設群の一部でもある。

船越の旧海軍工廠造兵部には、明治期から水雷、無線、電気等の工場が集積し、昭和20年の最盛期には3万人が働いていたという。海側には船着き場が長くとってある。「たぶん、かつては海側が正面玄関だったんだね」と参加者の一人がおっしゃった。



左：横須賀市船越にある東芝ライテック工場。かつては旧海軍工廠造兵部工場で、当時の建物がまだ多く活かされている。歩道橋上から撮影。

右：同工場を海側から撮影。かつての佇まいを残す棟が緑に覆われている。向こうのほうに先ほど撮影していた歩道橋が見える。

長浦湾は、奥行きが深く、水面は鏡のようで、素人目にも使いやすそうな良港とみえる。陸側の地形は複雑で、小刻みな起伏にふちどられ、まさに自然の要塞に守られている。旧海軍工廠造兵部を背にして海側に目を転じると、現役の港とし利用されていることがわかる。この日も船が接岸していた。



左：みえにくいですが、鉄骨の横梁に「横須賀造船所」と書いてある。今は使われていないという。

右：その手前に船が接岸。港は現役である。

かつて船越地区は、海とともに生きる里だった。国道16号線を挟んで、景德寺(1369年開山)、船越神社(熊野社、日枝社を1928年合祀。熊野社は景德寺地主神とも伝)がある。その昔、観音様が小舟で流れ着いたことから「船越」という地名となったとの言い伝えがあるように、人々の生活は神仏とともにあった。人々の敬虔な気持ちは、軍事基地時代をくぐりぬけ、現在に至るまでしっかりと受け継がれている。

軍事基地時代、周辺には、兵器工場、学校、病院等々が立地していた。海陸とも軍事輸送の動脈が通る地域でもあった。社寺や庚申塔には、人と地域の安全を祈り続けた想いが凝縮されている。



左：船越神社の境内に祀られたある椰（なぎ）の木。風にも通じるとともに、葉を身につけると「想いが叶う」「好きな人と添える」との言い伝えがあるとのこと。
 右：駒寄の庚申塔。道路工事の度に移設され、今は船越神社境内にある。町の文化遺産として大切に堂に収められている。

再び臨港のエリアを歩く。田浦港町はまさに軍事基地の一部として拓かれた。海上第2術科学校（旧水雷学校）で資料室を見学。シティガイド協会が予約していたため、案内・警護要員の隊員が随所に立ち、気持ちよく挨拶してくれた。施設を囲む掘割では、フグの大群が出迎えてくれ、ここが海に直結したエリアであることを気づかせてくれた。

やがて風景は倉庫群に変わった。旧海軍軍需部長浦倉庫跡である。今も一部自衛隊施設となっているが、昭和21年4月に商港に転換されてからは「緊急食糧受け入れ港」となり、その後は民間会社により輸出入、捕鯨基地などとして活用され、今も輸入米倉庫、砂利・砂・石材などの作業船基地として使われている。かつて、長浦港とJR田浦駅は引き込み線で結ばれ、長浦倉庫群には線路が網の目のようにめぐらされ、昭和50年代までは貨車が走っていた。現在は、一部米軍が使用する個所を除き敗戦となったが、鉄路はまだ所々に残っている（下の写真左の、倉庫と人物の間にあるラインはその一部）。



左：倉庫群の倉庫は多くが赤レンガで建造されたが、現在は内外とも改装されたものが多い。それも古くなり、ツタが覆う個所もあって絵画的。
 中央：今は使われていないベルトコンベアもツタに占領されている。
 右：アート活動の拠点又は展示場として活用された（ている？）らしい倉庫。

平坦な臨海部と一転して、陸側は非常に起伏に富み、国道や鉄道（JR, 京急）は、いくつものトンネルを通り抜ける。一つの丘に何本ものトンネルが穿たれた姿は痛々しくもある。

R田浦駅は、トンネルに挟まれた駅で、停車する列車は、頭（前方）とお尻（後方）をトンネルの中に隠すような格好になる（横須賀方面のトンネルの写真は3/19記事で掲載した通り）。

JR田浦駅を背にして山側を按針塚を目指す。「のの字坂」というカーブ道が造られているように、傾斜がきつい区間をすぎると、尾根の道に至る。「浦賀道」と呼ばれる古道で、このあたりは十三峠という。保土ヶ谷宿から13番目の峠という意味があるともいわれるが、はっきりしないらしい。今は住宅地が続いているが、その昔は寂しい道で、蛇や狐の伝説も残されている。

尾根の道はやがて、按針塚公園に至る。按針ことウィリアム・アダムスは、16世紀後半、シェイクスピアと同年の生まれで、船団の航海長として極東を目指し、苦難の末自ら乗っていたリーフデ号1隻で日本にたどりつく。才長け、人間的にも優れていたアダムスは、家康の外交顧問、技術顧問となって功績を上げ、横須賀逸見に石をもらい、屋敷も持つ。日本橋の商家の娘を妻に、二人の子供を設けた。57歳で平戸で病死するが、江戸を見守る場所に墓所をとの遺言により、ここ逸見に塚を設けたという。今、眼下の海には日米の軍用船が停泊している。はるか遠い自国に続く海を望めることを

現在、逸見では、アダムスが暮らし、眠る地域として、ゆかりの寺（浄土寺）を中心に「按針のまち逸見を愛す

る会」が立ちあがり、まちおこしははかられている。

プログラムの最後は、この浄土寺で按針の話を聴き、名物の「かりんとまんじゅう」とお茶をいただくというサプライズで締めくくられた。まちおこしへの熱い想いが伝わった。



左：按針塚公園にある按針塚。右がアダムス、左は妻ゆきの供養塔。
中央：按塚公園から東京方面を望む。この日はかすんでいてみえないが、晴れた日にはアダムスが望んだ通りお江戸が遠望できるのだろうか。
右：浄土寺の梵鐘。一度アメリカに渡ったが近年返還されたとのこと。アダムスには叶わなかった帰郷を実現？！

<番外編>途中で出会った守り人たち



左：海上自衛隊第2術科学校のフェンス越しに記念園地を見ることができる。旧海軍時代に国を守ってきた人々の慰霊コーナーでもある。水雷学校も今は「たばこのぼい捨て禁止」のポスターで守られている。
右：町かどで声をかけてくれた方。「ほたる」生息地の整備をしてきたという。防犯パトロールのベストの肩に載せた長鎌の先に、軍手をかぶせて。頼もしいまちの守り人に感謝。

今回も、個人では決して得られない知識や体験をたくさんいただきました。横濱金澤シティガイド協会の皆様、参加者、受け入れ先の皆様に感謝申し上げます。

今後もしよろしくお願いたします！ 2010.06.08 Tuesday

横濱金澤シティガイド協会 HP:<http://www.yokokanaguide.com/index.html>

■ 「産業観光のビジネス化を考えるシンポジウム」に行ってきました

職場の同僚のおかげで、貴重な集いに参加させていただきました（開催概要は、本文下に掲載）。産業観光推進会議が最近とりまとめた報告の発表を兼ねた、熱く、気持ちのよい集いでした。以下、参加しての感想です（文言は、ご発言通りではなく、聴衆の一人として受け止めた印象によっています。よい刺激を受け、少々筆が走るかも。あらかじめすみません）。

「産業観光ビジネスモデルの手法」と題する報告書の提言は、

- ・産業観光は、富を磨き、富を増やす（国富・地域富・個人富）との認識が大事
- ・産業観光ビジネス化のポイントは、企業・事業リネージュによる価値創造
- ・産業観光の更なる深化は、供給側からだけではない、顧客共創型（旅人起点型）ビジネスモデルへのトライアル
- ・観光立国の土壌は、国民観光（市民観光）という国策

とのこと。

多摩大学大学院の望月照彦先生が、基調講演でこれを解題してくださいました。旅行者を中心に置き、「旅の動機～企画～実践～記録～更なる動機に」とのスパイラルを豊かに回すためには、国、旅行会社、地域がこれをよりよくサポートし、豊かなスパイラルへとつなげていく仕組みが必要。国・地域・個人の富を高めるツーリズム・マネジメントを実現するため、総合的なパートナーシップを支える「ツーリズム・オーソリティ」（プラットフォーム）を形成しようと。それは、観光という場を借りて、時代を次世代に手渡していく協働作業なのだ。

産業観光という、一見無機的にみえる分野が、サプライサイドではなく、「人」を起点とするスパイラル形成のカギを握るといふご発言は、今極めて意義深く、これまでの検討に裏打ちされた深いご認識に基づくものと感じることができました。

パネルディスカッションも、極めてポジティブで、逃げていない潔さを感じました。

姫路城改修を逆手に取った「改修見学観光、城下町技術観光」、京浜急行が沿線地域と進めている「軍港めぐり、産業観光巡回バス等」は、いずれも、様々なバリアをクリアして実現されたチャレンジングな取り組みとお見受けしました。

そして、JR 東海という我が国鉄道旅客事業を代表されてきたお立場から、「交通事業者が産業観光に取り組むステップは「①旅のアクセス手段、②駅からウォークがあるが、いずれも受動。次のステップとして③鉄道そのものを観光資源とする事業に取り組む時代を迎えた」とのご発言があり、感動しました。長らく日本人がふりかえることを忘れていた、「旅そのものの文化化」に深く関わる、極めて新鮮なお考えと思ったからです。

経済産業省と進めてきた近代化産業遺産活用推進の流れは、この会議をベースに、より広い産業観光へと展開していく方向にあるようです（個人の感想です）。それはすなわち、歴史というオブラートを通さず、直に実社会と関わっていくということでもあります。

産業現場は、これまでの技術の到達地点であり、未来への出発点でもあります。日本のものづくりが正念場を迎えている今、過去と未来の結節点として「産業現場」をとらえなおし、次世代に示していくということは、大事なことでありつつ、一方で、一筋縄ではいかないことも多いと思います。企業の財産である「技術」をどこまでどう公表するか、マイナス部分をどこまで振り返るか。それは、我々現役の度量と、生き方そのものを問う作業でもあります。

しかし、それは、産業の文化化、企業の文化化、観る側の文化化に必ずやつながるはず。産業観光がきちんとできる国・地域・企業こそが、子どもを育てられるオトナといえるのかもしれない。そんなことを考えさせられました。

人を中心に据えた未来づくり、観光という分野から社会経済の流れを変える真っ向勝負、逃げていない空気を勝手に感じ、極めて気持ちよく参加させていただきました。

この流れは、我が近代産業遺産アート再生学会とも共通していますよね。

表から裏から、共同戦線を張り、きばっていかないと。誰がめげてもダメですね。

ご発言者の皆様、事務局の皆様、ありがとうございました。

今後ともよろしく願いいたします。

●開催概要-----

「産業観光のビジネス化を考えるシンポジウム ～産業観光推進会議（第三次）事業報告～」

主 催：全国産業観光推進協議会（事務局：財団法人日本観光協会）

日 時：7/27、14：40～17：00

場 所：霞ヶ関ビル 35 階 東海校友会館「望星の間」

参加費：無料

内 容：

- ・主催者挨拶：福川伸次氏（財団法人機械産業記念事業財団会長、産業観光推進会議座長）
- ・基調講演： 「産業観光の新たな事業創造に向けて」
望月照彦氏（多摩大学経営情報学部教授・大学院教授、推進会議ワーキング座長）

- ・パネルディスカッション：「企業・地域にみる産業観光のビジネス手法」

パネリスト

望月照彦氏

内海将博氏（姫路市商工観光局長）

原田一之氏（京浜急行電鉄株式会社常務取締役鉄道本部長）

須田 寛氏（東海旅客鉄道株式会社相談役、全国産業観光推進協議会副会長）

コーディネーター

丁野 朗（氏社団法人日本観光協会常務理事・総合研究所長）

- ・資料：産業観光推進会議「産業観光ビジネスモデルの手法（要約版）」H22.7 ほか

2010.07.28 Wednesday

■ 現役です、東海道！② ～シティガイドと歩く神奈川宿～保土ヶ谷宿～

●脆弱な現代人に挑む、灼熱の東海道

7/21、再びNPO 法人横濱金沢シティガイド協会プログラム「神奈川県下の東海道を歩く」の客となった。

今回は、京急神奈川新町駅から相鉄線天王町駅までを歩いた。集合時間の9:30にはすでに灼熱の暑さで、参加を見合わせた方も若干あるとのことだったが、総勢50名近くが元気に参加した。

真夏の太陽は白く容赦ない。サングラスも日傘も気休めにすぎない。かつて、東海道の旅人だって、真夏も歩いたはずである。電車、自動車に冷房と、文明の利器に頼り切っている心身の脆弱さと、季節とわたりあう知恵のなさを思い知った。

横濱金沢シティガイド協会のプログラムは、ガイドと数人の参加者が数人～10人くらいの小グループに分かれて歩く。参加者は集合した順に班に分かれ、担当ガイドに率いられる。今回私は、大野さん率いる班の一員となった。ご自身は職業柄、心身とも鋼のように鍛えられた方（私が勝手に「鉄人大野」とお呼びしていることを、ご本人はまだご存じない）で、どんな炎天下でも足取り軽く、説明によどみがない。他の方々も負けてはおられない。最もバテたのは、恐らく班の中で最年少(?)と思われる私だった。

●神奈川宿を知るにはガイド情報が必須

前回歩いた川崎宿と鶴見あたりは、多摩川と鶴見川というメリハリもあり、現在の都市景観のなかにもおぼろに、かつての宿の姿をつかむことができたように思う。しかし、神奈川宿は、やや難解に感じた。それでいて、江戸時代の宿場町としての歴史、近代日本幕開けの歴史が、ぎゅっと詰まっっていて、歩けば社寺に当り、その社寺には、外国の領事館跡等、開港時代の歴史が隠されている。「横濱」や「神奈川」の地名も、この地に発するともいわれている。

かつては宿場町と寒村だったこのあたりは、日本の近代化の幕開けを引き受けたことで、150年の間にあまりにも大きな変化を受け止めてきた。

濃厚で重要で、しかしわかりにくい神奈川宿。その姿にふれるには、ガイド情報が必須である。

市や区は、舗道の舗装ブロック、説明板に、パンフレット（区作成「神奈川宿歴史の道」）を用意して名所ポイントを案内している。舗道のブロックと同じ波型のデザインの街灯、浦島太郎伝説にちなんだ亀のデザインを乗せた車止め等々、あの手この手での案内が涙ぐましい。

それでも、一人ではどう歩いたらいいか、なかなかわからないだろう。

横濱金沢シティガイド協会が用意してくださった資料類と、鉄人大野による説明を頼りに、かろうじて伝い歩き、どこがどうだったのかおぼろに記憶するのがやっとというのが正直なところである（それほどポイント数が多く、そして、暑かった）。

<ガイドたち>



左：市が「神奈川宿歴史の道（魅力ある道路づくり事業）」で整備した、名所ガイド舗装

中：同名所ガイドパネル

右：横濱金沢シティガイド協会が用意してくださった資料一式。写真上方やや右寄り並んでいる丸い形は、同協会作成の東海道ウォーク記念バッジ。広重の東海道 53 次から川崎宿（前回ウォーク分）、神奈川宿をバッジに。

●外国人を引き受けた痕跡

そもそも神奈川宿は社寺だらけ。開国は、江戸から離れた横浜・神奈川の地が引き受けた。多くの寺が要人の居がし、工事中につき引き受けられないとはねか痺めぐりになりがちである。らなかつた地元の混乱と苦労は、いかばかりか。



左：オランダ領事館跡（長延寺）今は寺もなく公園。手前は健康遊具、奥は京急線の線路。

中左：浦島太郎ゆかりの慶運寺はフランス領事館に使われた。亀に乗った浦島父子塔の後ろにひっそりと領事館跡の碑が佇む。

中右：アメリカ人宣教師宿舎跡の碑（成仏寺）。ヘボン逗留地。でもある。

右：イギリス領事館跡の碑（浄龍寺）

フランス領事館（慶運寺）、イギリス領事館（浄龍寺）の間には、滝の川が流れている。当時の人々が、これを英仏海峡（ドーバー海峡）になぞらえたであろうことは想像に難くない。ちょうど両方の寺を行き来する際に渡るのが「どぼし」というのは、あまりにもできすぎている？！

<英仏海峡?!>



左：成仏寺（北条氏の家紋が） 中：滝の川にかかる「どぼし」 右：浄龍寺

●浦島伝説と、鎖国・開港の不思議な関係

万葉集所載の「浦島太郎伝説」（巻第九、4540 首中の 1744 首目の長歌、1745 首目の短歌）の写しが手元にある。浦島伝説が万葉集に載っていると聞いた「鉄人大野」が、自ら万葉集の頁を繰り、該当部分を発見、それをいつもの几帳面な手で書き写されたものだ。

読めば確かに太郎物語である。伝えによれば、太郎は 478 年に龍宮へ行き、825 年に故郷に帰ってきたという。太郎伝説は全国にあるが、神奈川区が最有力候補とのこと。

私は、神奈川区の太郎伝説は、300 年の鎖国から国際社会に目覚めた地を象徴する物語なのではないかと思っていたが、その千年以上前の物語だったのだ。

それにしても、300 年の時をワープした太郎、300 年の鎖国を解いた日本の物語がこの地に同居しているとは、なんと奇遇なことだろう。

太郎物語は、その後も続いている。慶運寺（浦島寺）には、亀を助けた太郎のもとでペットが供養されている。神奈川区の舗道は、亀を載せた車止めで守られている。

<浦島太郎さんの気配の一部>



左：故郷に帰って父母亡きことを知った太郎が流した涙からできたという涙石（成仏寺） 中：ペットの墓（慶運寺）。亀をかばった動物好き？の太郎のもとで供養されている。

右：亀を載せたデザインの車止め。竜宮城ならぬ神奈川歴史の道の案内役。

●街道をしのぶ風景

東海道（神奈川宿）は、神奈川新町駅から西に向かい、権現山・神奈川駅あたりで若干北に折れ曲がり、本覚寺を右に見ながら台町へとつらなる。その間、ずっと海岸線に沿う道であった。太郎の涙石も、潮の満ち引きで濡れる位置にあったともいう。

仲木戸から神奈川に向かう道筋は、国道と京急線に挟まれ、住宅が密集していて見通しがよくないためか、当時の景観をすぐにイメージすることが難しい。

そんな中で、神奈川地区センターとその周辺は、当時の景観復元に努力している。若い松並木が整備され、地区センター前には「高札」、センターロビイには、神奈川宿のジオラマが設置され、パンフレットや資料も用意されている。

一方、復元の労を経ずして、旧東海道の姿をしのぶことができるエリアもある。神奈川駅から保土ヶ谷宿へ向かう街道筋である。かつて眼下に海を望んだ坂道の途中には、龍馬の妻おりょうが働いたという茶屋（旧さくら屋、現田中屋）があり、蔵の残る家々も残るなど、往時の風情が伝わる。

<旧東海道をしのぶ風景>



左：復元された？松並木

中：神奈川地区センター前に復元された「高札」 右：龍馬の妻おりょうゆかりの茶屋←※写真：横濱金澤シティガイド協会

●変わりゆく風景

鉄道や道路、都市の発達、東海道の景観を大きく変え、その威光を奪っていった。

明治以降の都市開発では、東海道が長年連れ沿ってきた丘を穿ち、崩し、その土砂で海岸を埋め立て、現在の横浜都心部の原型が築かれた。開発を引き受けた高島嘉右衛門は、晩年を、自らの偉業を望む丘の上の屋敷で過ごしたという。

変化はその後も続き、埋立地には産業が立地し、駅周辺には商業地域が発達した。JR、京急線、東横線、相鉄線、市営地下鉄線がのび、東横線はやがて地下化した。台町には、旧東横線のトンネルが閉鎖されたまま残されている。

金沢八景を擁する我が金沢区の風景も変化を重ねている。「変わりゆく横浜・金沢の風景」のタイトルで金沢区の姿をとらえたサイトが参考になる。滝の川、権現山、台町あたりは時間と空間が交錯するミラクルなエリアであり、ぜひとも再度散策してみたい。 <http://kanazawa-wanokai.in.coocan.jp/LSK/index.html>

<鉄道や道路が上方を通過>



左：笠楯稲荷神社の目の前を横切る京急線の高架

中：慶運寺（浦島寺）近くで滝の川を横切る京急線

右：そのやや下流で滝の川を横切る首都高

<都市開発に翻弄される鉄道>



左：神奈川駅。旧地形から抜け出そうと、背伸びしているかのようにみえる。

右：旧東横線跡。現在、東横線は地下にもぐってみなとみらい線につながっている。※写真：いずれも横濱金澤シティガイド協会

●失われた風景

現神奈川県センターの南方に、明治期に海上の砲台としてつくられた「台場」があったことを知る人はどれほどいるだろうか？ 埋め立てられ、貨物の引き込み線の軌道となったその下には、今も旧台場が眠っているという。Y150 記念の一環で、一部の発掘調査、公園整備、説明版設置等が行われたが、残念ながら当時の気配を感じる手掛かりは薄い。住宅地のへりに一部、礎石が見える箇所があるが、民有地になっているためか、歴史遺産としての環境整備には工夫しそうである。

<台場の輪郭を示す説明版>



※写真：横濱金澤シティガイド協会

●たくましく！

神奈川県センターに近い熊野神社（神奈川県郷の総鎮守：1087年に紀州熊野大権現の分霊を権現山に勧請したのが始まり）の境内裏手に、大銀杏がある。樹齢400年といわれ、1868年の神奈川大火、横浜大空襲などで燃えたにもかかわらず、驚異的な生命力で生き返り、焼跡を残しながらもたくましく生き続けているという。その名も「火防（ひぶせ）のイチョウ」。あやかりたいものである。

<熊野神社の「火防（ひぶせ）のイチョウ」>



中が黒く焼けたまま、今もたくましく生きている。

今回も、横濱金澤シゴティガイド協会の方々と、参加者の皆様のおかげで、楽しみながら歴史を学ぶことができました。今後ともよろしくお願ひします。・ 2010.07.28 Wednesday

資料：NPO 法人横濱金澤シティガイド協会ガイド資料「神奈川宿～長延寺から追分まで～」

神奈川県「神奈川宿歴史の道パンフレット」 慶運寺「浦島伝説について」 等

■ 追浜カフェに行ってきました。今回は、壮大な海洋深層水循環の話。深層水の真相はいかに？！

横須賀のインテリジェーションズこと、追浜行政センターの青木館長のお誘いにより、6月17日（木）、またしても追浜カフェに参加させていただきました。

追浜カフェは、海洋研究開発機構（JAMSTEC）と追浜行政センター・おっぱままちづくり連絡協議会による協働型のサイエンスカフェである。「海洋と地球を語ろう、科学技術のお話乾杯」というキャッチコピーが物語っており、研究の現場からの興味深い話と、おっぱまワインを味わう夕べのひとつときである。隔月開催で今回は7回目とのことだが、0回目もあったので実質的には8回目とのこと（私は、第5回からお邪魔させていただいている）。

さて、今回のテーマは「海洋深層水利用から見える地域性豊かな海と地球温暖化のしくみ」、講師は海洋研究機構研究支援部シニアスタッフの豊田孝義先生。穏やかな語り口で紐解いてくださったのは、実はすごい、海洋深層水循環の話であった。



左：講演風景 右：講演後豊田先生に昌子（しょうじ）先生から花束贈呈

海洋深層水を活用した地域産品などが話題となっているが、太平洋で日本沿岸の深層水は、実は海洋学の用語では北太平洋中層水なのだそう。

海洋深層水は、お椀のようにくぼんでいる北極海の西側出口（グリーンランド沖）から大西洋の海底に流れ込み、広がりながら南下し、アフリカ大陸の南方沖あたりで、南極方面からきた深層水と合流して東に向かう。その時点での流量は何んと4000万トン（アマゾン川200本分！）。その超大量の水が潮汐の影響を受けながら東方に向かい、オーストラリアを北に見ながら東に回り込んで太平洋を北上し、やがてベーリング海に至る。

海洋深層水は、冷たく、太陽光も届かないためか、水を腐敗させる種類の微生物がいない。プランクトン等の微生物は表層から深層に沈降し、長い時間をかけて分解・無機化して栄養塩に変わる。この、窒素リン酸を含む栄養塩に恵まれた深層水は、ベーリング海沖で上昇した後に大量のプランクトンを育て、これがサケ、マス等の魚類を豊富に養うというメカニズムが成立しているという。日本の大手水産会社は、この資源の恩恵で成長し、やがて他国もこれに気付いて国際競争へと発展してきた。上昇した深層水は、滋味豊かな表層水（親潮、黒潮等）となって太平洋を駆け巡り、豊かな海を育んできた。

なお、日本海の深層水は、南北の出入り口が極めて浅いため、太平洋の深層水循環とは別個に、固有の循環をしているとのことである。

深層水は、地球の地形と気象のバランスの中で循環している。地球は内部も大対流を続けており（第5回追浜カフェで学んだ）、地殻も地表も常に変動している。地象、海象、気象ともダイナミックに活動し続ける、地球はまさに生きた星である。

そのような環境の中で、人類は生き延びるための知恵を磨いてきた。ここ数千年はこれまでの地球の歴史でも特例的に気候が安定しているとのこと。そのことで文化をはぐくむ余力を持つことができたのではと、豊田先生は話された。

過去にも、気候変動（火山爆発も主要因の一つ）により海洋水循環に変化がみられたことがある。そして今また、長らく続いてきた海洋水循環に異変が見られるという。深層水の流量減少である。

世界の研究者が、固唾を飲んでその行方を見守り、対策を考えたりしているが、果たして人類の努力で何とかな

るものかどうか。

「そこらじゅうで海洋深層水を利用したら、枯渇してしまうのではないか」と思っていたのは私だけではないと思うが、それは莫大な流量からみればほんのわずかであり、資源保持の視点において大きな影響はないだろうということが素人目にもおぼろげにわかった。しかしこれを逆に見ると、地球の営みに逆らう作用を人為的に企てることは至難の業であるということでもある。

三浦半島でも、海洋深層水利用は、一時期話題となったが、機械（淡水化プラント）の消耗が予想していたより速いことがわかり、費用対効果の観点から1年ほど前より生産が中断されている。

海洋研究開発機構による深層水研究は、数年前に国費投入が絞られ、その後進みにくいと聞く（平成15年度末に中断）。

2000年というタームで地球を行く海洋深層水。これと向き合うためには、研究活動も根気強い時間の長さを要するのではないだろうか。

海洋国家日本が海洋の研究を進めることは、地球的規模での意義に値するのではないか。気候、地形とも多様性溢れる日本の各地域で、海とのきめ細かな関わりを守り育てていくことは、日本ならではの海洋文化を守り育てるのみならず、人と地球との関係を考えていく上でも1極めて意義深いことであり、世界に貢献する知的財産ともなっていくのではないか。

この集いの最後に、「NPO法人アクションおっぱま」という産学官協働型の地域づくり活動グループを主宰する昌子（しょうじ）先生から、講師の豊田先生に花束のプレゼントがあった。研究機関と地域との連携を象徴するかのような、素敵な光景だった。

日ごろの協働関係を物語るエピソードとして、参加者の記憶に残る思い出となりそうである。

*海洋研究開発機構豊田孝義先生、追浜行政センター青木猛館長に監修していただきました。

ありがとうございました。

・ 2010.07.18 Sunday

■ 今は静かな震生湖にて ～古の災害の記憶を残す里～

あれは梅雨入りをした頃の日曜日だったろうか。雨模様の日だった。

神奈川県秦野市と中井町にまたがる丘に「震生湖」という湖があるというので、出会いたくなった。

秦野市郊外の住宅地から坂を上りはじめると、すぐに人家が途絶え、農場があり、尾根の向こうに木立が見えてきた。

「震生湖入口」とあるので曲がってみたが、湖はまだ木立の中にあって見えない。しかし、細い道を下るとすぐゴルフ練習場があり、その先にあっけなく湖面が見えた。コンパクトな配置であるが、湖畔に駐車場も整備されていてありがたい。

震生湖は、関東大震災の時に川がせき止められて生まれたのだという。その時、二人の小学生の女の子が行方不明になったといわれる。少女たちを飲みこんだ湖は今、釣りや野鳥観察のポイントとなっている。

先月訪れた旧相模川橋脚は、長年埋もれていたものが、大震災の時に再度この世に生えて出た。震生湖は、同じ時に新たに生まれた。人の命を水中に沈めながら。



写真左上：釣り場（有料）で釣り糸をたらす人々。ブラックバスやヘラブナが釣れる。

右上：湖畔で水鳥と遊ぶおじいちゃんと孫（すみません、撮っちゃいました）。

左下：湖畔はゆっくり歩いて一周しても十数分。お堂で猫ものんびり。

右下：帰り道、尾根の道から秦野駅方面のパノラマを撮影。

尾根の道に差し掛かる交差点に「池窪の大悲観音」という案内標識がある。帰り道は、その標識に誘われるように中井町方面に下った。下りきったところに、気持ちよく手入れされた小高い林地があり、中腹に小さな石の祠が建っていた。寛永年間から村を見守り続け、今も住民の手により大事に扱われている。

大悲観音のお堂は、そのすぐ先にあった。天明2年の建立ということは、富士噴火の災害にまつわる観音だろうか。その時、秦野には32cm、中井には16cm灰が積もったとする資料もある。木のお堂はまだ新しく、里の人々が管理を絶やしていない気配がある。悲しい出来事を語り継ぎ、祈りを共有する里が、まだあるということに心打たれる。

観音堂を背にして左の丘を仰ぎ見ると、サザエ堂のようなコンクリートの構造物がそびえている。なんだろうと思って近づいてみると、無人で、ゴーという音がする。荒涼とした空気感。地の底からの終わらない唸り声のようにも、「慟哭」のようにも聞こえる。螺旋は、祈りを天に届けるための発射台のようにも、悲しみを昇華させる誓いの形のようにもみえる。給水塔だろうか？ 不思議なことに、施設名も説明版もない。地図にも、中井町のホームページにもない。名無しの螺旋塔である。その下には八坂神社があり、やはり美しく手入れされていた。

富士噴火の年に建てられた観音、地震で生まれた湖、最近建てられたらしい螺旋塔・・・

今は静かな湖面、丘、里の中に、人々の命を飲みこんだ激しい天変地異があった。

岩倉の工場や住宅地に囲まれたところに異空間があることを、どれほどの人が知っているだろうか。あるいは、よそ者は知らないほうがいいのかも。ひっそりと古の災害を語り継ぐ里があることを、私は知ってしまったが、

2010. 07. 06 Tuesday



写真左：寛永年間に建てられた石の祠。中：池窪の大悲観音。天明2年建。右：不思議なサザエ堂（螺旋塔）

■ 東京湾第三海堡構造物移設工事見学会に行ってきました

●画期的な見学会に誘われた

横須賀のインディージョーンズ（追浜行政センター青木館長）から、第三海堡の移設作業を開始する、見学会を開催するので日程が合えばとの連絡をいただいた。

引き揚げて一旦東亜工業さんの敷地内に設置していた海堡構造物の一部（4基）を、公園（夏島都市緑地）に移設して展示・保存することになったとのこと。4個の構造物を4回に分けて移設し、うち3回を公開作業にするという、画期的な企画である（うち1回は見学施設の休館日で見学はなし。見学会会場は、横須賀市リサイクルセンター「アイクル」バルコニー）。国、市、地元の合意なしには実現しない、まさに協働の賜物である。

NPO アクション追浜の昌子（しょうじ）先生に、早速参加のお願いをし、友人と初回の見学会に参加した。昌子先生は、海堡施設の保存の必要性を提唱されたばかりか、それを実現まで導かれたキーパーソンで、追浜一帯の地域資産に光をあてられている。

●現場の迫力

8月7日（土）、初回はよく晴れ、暑いが爽やかな日となった。見学申込者は約30人、年齢も性別もバラバラである。当日は、申込者以外にも、岸壁で見学している人々もみられた。

アイクルに向かう途中、まず、その隣に出現した大きなクレーンに驚いた。腕に、深田サルベージと書いてある。3,000t吊起重機船「富士」がクレーンを載せている。

クレーンの腕の先には、岸壁に寄せられたはしけ（？）があり、その上にコンクリートの構造物が二つ、載せられている。第三海堡のうちの、探照灯、観測所という構造物のようだ。本日はこのうち、探照灯の移設が行われる。

構造物には、通路や階段なども見え、アーチ型の出入り口からは、まだひょっこり、兵士が出てくるのではないかとさえ思われるほど生々しい。

作業は、13:30から開始された。クレーンの綱がウィンチに巻かれていく。構造物は、みるみる宙に浮き、青い空と海を背景に、下部の突起もはっきり見えてきた。歴史的瞬間に立ち会っていると感じ、気が引き締まった。

構造物は、海上から海中へと身を移し、切り刻まれて地上に置かれた。そして今、空中にあって、白日と衆目にさらされている。時代の変化に身を委ね、鉄のロープに身を吊られながら、その姿には、今も軍施設らしい毅然とした佇まいがある。その存在感に息を飲んだ。

●東京湾第三海堡の経緯と今後

東京湾第三海堡は、明治時代、帝都東京を守るために築かれた海防施設の一つで、観音崎～富津岬～猿島の守りをより強固なものとするため、浦賀水道中央に築かれた要塞（砲台）である。

我が国初の本格的な人工島と聞いたが、水深40mで潮流も激しく、世界的にみても難易度の高いあ工事だったとのこと。しかし、やがて高波によって破壊され、関東大震災でも大破、施設の3分の1が水没した。その後は、大砲技術の進歩により必要性もなくなり、修復されることはなかった。

平成に入るところまでは、引き潮になるとその輪郭をわずかに水上に現していたが、海上交通の安全確保の必要から、撤去されることとなった。

撤去作業は、平成12～19年にわたって実施され、一部（大兵舎）はうみかぜ公園に移設され、探照灯、砲台砲側庫、地下通路、観測所と呼ばれる4つの構造物は追浜展示施設（東亜建設工業内）に保存・展示されていたが、展示施設の維持が難しくなった。

国、市、関係者による協議を通じて夏島都市緑地への移設が実現したとのことであるが、事業化には関係者の熱意と深い検討を要したことは想像に難くない。

しかし、これだけの事業を実現された昌子先生はじめ関係者の方々は、保存・活用は、「これからが本番、これから始まるのです」と言われる。

夏島都市緑地周辺は、貝山、夏島をはじめとする旧海軍航空技術工廠跡等の近代産業遺産、海洋研究開発機構、追浜工業地帯等、現役の産業施設や研究施設が立地する希有なエリアである。

「第三海堡もこうした地域資産と連携し、活用をはかる」ことは、追浜を愛し、活性化を願う関係者の願いであるとともに、日本が歴史をきちんと見つめて先に進むためのステップの一つとしても大事なことのように思う。誰にとっても他人ごとではない、今の時代を生きる者が共有する、大きな宿題の具体的な一つとして。

貴重な見学会にお声掛けいただいた青木館長、昌子先生、当日説明や案内をいただいた深田サルベージ株式会社、NPO アクションおっぱまの方々に感謝しつつ、近代産業アート再生学会としても、何らかの形で保存・活用のアイデア等で協力させていただけることはないかと思いつけている。

※以下の写真は、レンズの汚れにより、どれも黒い影があり、お見苦しいこととお詫びします。

<吊り上げ開始>



左：移設作業のための3,000t吊起重船「富士」。高さ130mのクレーンに驚く。

中央：はしけ(?)に載せられた第三海堡構造物。本日は右の「探照灯」と呼ばれる構造物を移設する。

右：巨大クレーンが構造物を引き上げる。クレーン操作はワンマンだという。

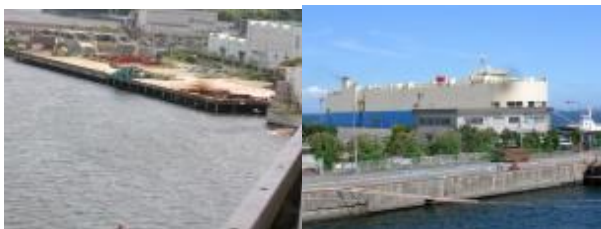
<いざ設置>



構造物が、設置場所の夏島緑地公園上部まで運ばれた。

下に準備された土塁上に設置されるが、構造物下部には突起があり、ピッタリ設置するため、地上クルーとクレーン操作者が最新の注意を払う。

<周辺風景の一部>



左：わかりにくいですが、左上部に今後移設される残りの構造物がみえる。右端中央で白い波を立てているのは、旧海軍水上飛行艇滑走路。インティ-青木館長に教えていただいた。

右：今後、第三海堡展示場となる夏島都市緑地の向こうには、巨大な自動車運搬船が。

引き揚げ作業中、小さな曳航船に導かれ、悠然と外洋へ向けて出港していった。

・ 2010.08.08 Sunday

資料：NPO アクションおっぱま「東京湾第三海堡構造物移設工事見学会資料」

■ 夏草や、つわものどもが夢の痕～長尾砦跡、モノレール跡、田谷地底伽藍～

7月24日、鎌倉ガイド協会が主催する「古都鎌倉史跡めぐり」のプログラムに参加した。この日のテーマは、「田谷の密教地底伽藍に涼を求めて～岡本・玉縄・長尾台・田谷を歩く～」。暑い日だったが、大船駅には数十人が集合した。

●兵（つわもの）の夢

大船観音の背中方面の丘を一気に上がると、長尾砦跡に連なる鎌倉市岡本の住宅地に出る。

住宅地はすぐに途絶え、緑濃い尾根の道へと入っていく。

長尾台（横浜市栄区）は、関東八平氏の一つ、長尾氏発祥の地といわれる。尾根の道からは、歩くほどに鎌倉方面や、栄・戸塚方面を望むことができる。鎌倉の北の守りの要地の一つだったことだろう。北条時頼と戦った長尾景茂親子も、ここで戦略を練っただろうか。1247年、時頼に敗れた長尾一族は散り（越後長尾氏はその後景虎＝上杉謙信を排出）、一部はこの地に定着し、1438年に長尾峠が築かれ、1512年には玉縄城の出城として整備されたという。

長尾砦跡は、現在、畑に囲まれた緑の中に埋もれている。

●ドリームランドモノレール

時代は移り、1964年、横浜市栄区の丘にドリームランドが開業した。ドリーム開発は、大船駅からドリームランドを5.3kmのモノレールでむすび、1966年5月に運転を開始した。しかし、構造上の問題が発見され、翌1967年9月には惜しまれながら運転を休止した。

その後、再開計画（浮上式にして相鉄線とつなぐ計画：1995年頃）も立てられたが、実現に至らず、今世紀になって正式に廃線となり、現在までに構造物はすっかり撤去された。

橋脚やレールは残っていないが、現在も丘の上にとろどころ、軌道跡が残されている。

参加者の中に、「ドリーム線に乗ってドリームランドに行った」という方がおられた。

しかし、そのドリームランドも、2002年に閉園し、現在は公園と墓園になっている（旧ホテルエンパイアは、横濱歯科大学校舎として残っている）。兄弟園だった奈良ドリームランドも2006年に閉園。子どもたちの夢は、ディズニーランドやゲームの世界へと場所を変えてしまったのか。

夢は醒めた。かつてここに遊園地とモノレールがあり、子どもたちの夢を載せたという記憶自体が、夢だったのではないかと思うように。



左：長尾峠から栄・戸塚方面を臨む

中央：ドリームランドモノレール（ドリーム開発ドリームランド線）の軌道跡

右：田谷に向かう道から長尾峠を臨む

●田谷の地底伽藍へ

長尾峠を降り、田谷洞窟へ向かう。戸塚方面の工場地帯が先に見えるが、そこに至る空間には広く田んぼが広がり、青い稲の波がすがすがしい。あぜ道には、朝顔やアザミなど、夏の草花が咲き乱れ、蝶が戯れていた。

しかしここは近い将来、横浜環状道路で貫かれることになっており、のどかな風景を楽しめる時間もわずかである。

田谷洞窟は、高野山大覚寺派の田谷山定泉寺境内裏手にある。

古墳時代(?)の横穴住居跡だったものを、鎌倉時代に真言密教の修行靴として掘り広げた。その後崩れ落ちていたが、江戸時代から再び伽藍工事が進み、総延長1kmを越す一大地底伽藍となった。現在公開されているのは、そのうちの250m程で、守り動物、物語伝説の絵、仏像、十二支、霊場札所など、様々なポイントがある。

洞窟内は、外の暑さがうそのように涼しい。狭い壁面にはノミの掘り跡がびっしり残っていて、所々にペルシャの伽藍を思わせるようなレリーフが掘られた丸天井が現れ、仏像が安置されている。全体的に素朴で、密教修行の場としての質実剛健さと、庶民の祈りを受け入れてきた土俗的な素朴さが融合している。出口付近の不動明王が、不動産業の守り神になっていると聞き、土俗的な祈りが今も生きていると知って面白かった。



左：道路計画地付近から田谷の丘陵を臨む

中央：田谷洞窟（田谷山瑜伽堂：地底伽藍）入り口（定泉寺）

右：地底伽藍には蠟燭を灯して入る。洞窟内は撮影禁止とのことでルールに従った

わずか2時間の旅の中で、兵どもの夢、子どもたちの夢、庶民の祈り、開発者たちの野心が、うたかたのように現れては消えた、そんな長い夢を見たあのような気分になった。そんな夢を見せてくださった、NPO法人鎌倉ガイド協会の方々に感謝する。・ 2010.08.08 Sunday

資料：NPO法人鎌倉ガイド協会 古都鎌倉史跡めぐり KG-22-7-A パンフレット 等